

郷土制度の構造と機能 (二)

徳 永 新 太 郎

五

泰平が永く続いた。それは封建制度による泰平であつたと同時に、また封建制度にとつての泰平でもあつた。この間、身分制度は時と共に益々整備し硬化してゆくかに見えた。社會の區劃は、上下にも左右にもいよいよ鎖性を加へ、互に越え難い溝渠をめぐらし、それぞれ自らの株をひたすら守り續けて行くかのやうであつた。横の移動や身分の下降さへ容易でなかつたとすれば、上昇が困難であつたとて不思議はない。殊にその身分制度は、主として上層の者の手によつて、上層のものの利害を中心として、立案もされ勵行もされたのであるから。(註二)

然し最もむづかしかつた百姓町人から侍にゆく途も、全く絶えてゐたのではなかつた。武士への途は、武功や文武の藝術や勤功やまた寸志その他奇特の行爲によつて、開かれて居ないのではなかつた。そして蟻の穴から堤も崩れると下世話にも言ふ。封建的な鐵壁についた幾つかの小さな通路は、やがて封建制度を崩潰せしむる一

因として小さからぬ意味を有つやうになつた。

然し何と言つても泰平無事の世に武功は建てにくかつた。兵農未分の古へと違ひ、國民皆兵の今日とも異り、專業的武士の地位の安固こそ社會秩序保持の第一義とされた當時に於ては、「百姓共武藝を學び、又は百姓同士相集り稽古致」すなどは、「農業を妨候計にも無之、身分を忘れ、氣がさに成行候基」(註二〇)であり、やがては「下々に而黨を組、公邊をも不憚様に成行可申哉」(註二一)と懸念され、總じて「堅く相止可申」筋であつた。但し百姓が在方に浪人などを留め置いて武術を學んだりすることが嚴禁されたといふことは、反面から言へば、その事實がかなりにあつたことの反映であり、事實「近年は劍術修業杯と號し、諸藩士或は浪人等在々を立廻り、百姓共右之風儀を學候者多く」(註二二)なりゆき、他面專業的武士のみによる國防の完璧が期し難くなつた事情と相俟つて、やがては諸藩に農兵論の擡頭となり後年の徴兵制にまで發展するに至つたのであるが、「百姓共武藝御制禁」を原則とする封建制度下に於て、この途を通つて侍となることはやさしい事ではなかつた。如何にも「武藝心懸能、數々相傳茂相濟、劍術體術測量算術者同門之倡出精いたし候に付」といふやうな事例が、郷士先祖附の中に見出だされはするが、それとて平の百姓に就てではなく、概ね他の通路を経て郷士に召し加へられてゐた者の重ねての昇進の條件であることが多かつた。また年毎に御手永寄又は數手永寄の武術仕合が郡代見分の下に行はれ、成績優秀の者は段上りをさせられることもあつたが、これも亦郷士の重ねての昇進の條件であることが普通であつた。

學藝によつて苗字帶刀を許され、郷士ともなり藩士ともなつた者もないではない。例へば後年肥後の碩學として安井息軒や鹽谷宕陰などとも親交があり、門下からは梧陰井上毅・井々竹添進一郎・古莊嘉門などを輩出せしめた木下犀潭も、元來は無苗無刀の一農民であつた。

木下宇多郎儀、文政九年四月學問心懸能致出精候に付、苗字帶刀御免御郡代直觸被仰付。天保四年六月爲御心附米拾俵宛五ヶ年間被下置。六年四月御留守居御中小姓列、十石三人扶持御足二人扶持。御次に被召加。(註三)

即ち二十二歳にして藩學時習館の試験に拔群の成績を得て、稱氏帶刀を許され、御郡代直觸の席に加へられ、三十一歳擢でられて藩主の伴讀となり、御中小姓列に加へられ、やがて世子の侍讀、府學訓導などをも勤めるやうになつた。然し「當時藩の風俗専ら武を重んじ師門の免狀四つを得ざれば家祿を襲ぐことを許さず。故に武技に長ずる者は一藩之を推尙し、文藝有て武技足らざれば士林之を蔑視して曰く、汝書物を冠にし來れ、我一槍之を斃んのみと。故に是時に當り讀書を以て身を起すは實に難しとする所、世の毀譽を顧みず特立して道を學ぶに志さざれば能はざるなり。」(註四) これは後年の侍講元田永孚翁の述懐であるが、士人の間でさへかやうであつたのだから、野人の境遇としては、それは二重にも三重にも困難であつた。木下犀潭のやうな事例は、文教の振興を怠らなかつた肥後藩に於ても、寧ろ異例に屬するものであつて、學藝によつて士分に拔擢される他の人々の場合にも、一つの限度として引用されたりしてゐる。

なほ自身學藝の造詣が特に深かつたのではないが、地方教學の振興獎勵に力をいたしたかどによつて一領一正

に擢でられた場合もある。(註五) 然しこれとて單に教學に盡瘁したといふ理由だけでかゝる「殊恩」を受けたのではなく、既にそれ以前に、多年の勤功や少からぬ寸志やが積まれてゐたのである。

それでは如何なる勤功が如何なる昇進を約束したであらうか。先づ村民の中から選任されて村政全體の中樞となつたものは庄屋である。庄屋に就ては、「其ノ時代(聖武天皇ノ御宇)ハ農兵不分、武士土着ノコトナレバ、此ノ長ハ今ノ名主庄屋ニハ異リ、一邑五十戸ノ軍役ヲ勤ル將タリ、貞永ノコロマデモ農兵分ラザレバ、式目ニアル莊官名主職モ百姓ニハアラズ武官ナリ。然し「其ノ後時代押移リ士農分裂シテ、村里ハ農家ノミニナリユキタルユ、一邑ノ内家柄正キ田園等多ク所持シタル百姓ヲ一村ノ長トシ莊官名主ト定メ、村中致支配コトニナリタリ。」(註六) いま問題としてゐる時代の庄屋は固より農民の出である。然し農民とは言へ一村の代表者であり指導者であり *vile* である。ところでかゝる人物が苗字を名乗ることを許され御惣庄屋直觸となるまでに要した勤功は四十年以上であつた。御郡代直觸となるには五十年以上、地士となるには六十年以上である。普通諸手永略手鑑類に御家人と記されてゐるのは地士以上であるから、假りに齡三十にして庄屋に任ぜられた村の *vile* は、事無く勤め通して九十歳を越えねば在中御家人にはその末席にすら連なれなかつたわけである。庄屋すでに然り。それ以下の村役人は推して知るべきのみ。村役人達が勤功の賞として、御家人の席に加へられたり、或ひは御家人の席には及ばないまでも苗字御免になつたり禮服や傘などが御免になつたりするといふことが、一體如何なる身分上の意味を有つたかの説明は、後に郷士の諸段階を一括して取上げる際に譲るとして、此處に一應、それら

に要したといふ勤功年數を示して置く。それは固より役の高下によつて異なる。山の口といふのは御山支配役の下に居て常に山林を見廻る役の名であり、頭百姓といふのは部落毎の百姓惣代ともいふべき役の名である。

勤功に對する賞服連席

庄屋在勤年數

山ノ口在勤年數

頭百姓在勤年數

傘 御 免

十五年以上

二十年以上

四十一年以上

禮 服 御 免

二十二年以上

二十七年以上

無苗御惣庄屋直觸

三十年以上

三十五年以上

苗字御免御惣庄屋直觸

四十年以上

五十年以上

御郡代直觸

五十年以上

六十年以上

地 士

六十年以上

(註七)

孝行その他の善行によつて苗字帶刀が許された例は諸國に散見する。享保五年幕府の「孝行之者、其外行跡宜敷者には御褒美可被下書付」の中にも、「一孝行之者。高持。但無高に候者、下人を召使候程之者は高持同様之事。銀拾枚、帶刀苗字を名乗らせ可申事」^(註六)とあり。その事例も孝義賞として諸國に見える。肥後に於ても、重賢公「入國のはじめ、先づ善良の民をたづね、孝子忠臣より、勸業の者にいたるまで、其程々に隨ひ恩賞ありしより、風移り俗易り、恩賞に預るもの、年々に多くして、四十年計の間に、ほとんど六百人に及べり。」その行狀を書きつゝつたものが、「肥後孝子傳」である。^(註九)然しそれらの褒美は、多くは衣服金銀銅米穀等の賞賜であ

り或ひは年貢差免などであつて、孝行のみによつて士席を差許される場合は寧ろ稀れであつたやうである。たとひ孝行が理由とされて士席を許される場合に於ても、その他に凶作水害などの際に村方を救恤したり、米錢を獻納したり、即ち後に説明しようとする所謂「寸志」的な「奇特成取計」を伴ふものであることが普通であつたらしい。(註二〇) また告訴賞としても「ととう(徒黨)の訴人銀百枚、こうそ(強訴)の訴人同斷、てうさん(逃散)の訴人同斷」とある他に、「その品により帶刀苗字も御免あるべき」ととなつて居り、更に「右類訴人いたすものもなく村々騒立候節、村内のものを差押へととうにくはゝらせず、壹人もさしいださず村方これあらば、村役人にても百姓にても重にとりしづめ候ものは御ほうび銀下され、帶刀苗字御免、さしつゝきしづめ候ものどもこれあらば、それ〴〵御ほうび下しおかるべきもの也」といふ明和七年の中央に於ける奉行の達があり、その事例も地方に無いではないが、告訴或ひは強訴押留の功による稱氏帶刀御免といふやうなことは、その性質から言つても決して昇進の常道として數多いものではなかつた。(註二一)

註(二〇) 農民より町家の者になる事嚴禁なり。虛弱不具

者の類出家沙門となる願は糺方の上許さるゝなり。「官職

制度考」二一一頁

(二一) 三浦周行博士「法制史の研究」中「社會を中心とせる江戸幕府の法制」

(二二) 文化二年五月廿三日附達。(大藏省編纂)日本財政經濟史料「卷二、一〇五八・九頁」その前年文化元年九月に

は町人の武藝を習ふものあるを戒しめてある。

(二二・三) 大山敷太郎氏「農兵論」就中「幕末における農

兵論の擡頭」所引幕吏木村政藏・「農兵不可然」の意見書

(三〇) 「肥後先哲偉蹟後篇」卷一・四七頁木下犀潭の條所引「家士先祖附」。徳富健次郎氏「竹崎順子」四八頁

(三一) 荒尾手永野原八幡宮社司月田石見甥

嘉永二年五月朔日、學問多年心懸厚格別相進、大勢之門人教導出精いたし候ニ付、士席浪人格被仰付、毎歲御米拾俵宛被下置候。

但鐵太郎一代限被仰付候。

〔肥後先哲偉蹟後篇〕卷一、三八―四〇頁、月田蒙齋の條所引〔會議控〕これは學藝を以て四十三歳にして士席浪人に、五十一歳御留守居御中小姓に仰付けられた例である。

「自辨を以江戸表遊學仕、根元極貧乏者にて非常之艱難を凌ぎ、數年刻苦仕」といふやうな熱心な研學とその後の手厚い教導ふりとは、同書所引時習館訓導達の推舉狀に明かである。

(四) 元田永孚翁「還曆之記」(山崎正董博士「横井小楠」上巻傳記篇三二頁所引)

(五) 徳富猪一郎氏「烟霞勝遊記」一九二、三頁、幸島鹽井撰徳富久貞君墓碣銘

(六) 「地方凡例録」(「日本經濟叢書」卷三)四〇三頁

(七) 内村政光氏「肥後藩の農村制度」中「村役人」の條所引の年數に據る

(八) 孝行之者、其外行跡宜敷者には御褒美可被下書付一孝行之者 高持

但無高に候者、下人を召使候程之者は高持同様之事銀拾枚

帶刀苗字を名乗らせ可申事

一孝行之者

無高獨身同様之もの

銀貳拾枚

右之通御褒美可被下之刀脇差免之候儀は、高持之者只今迄名主同様程之者には刀苗字をゆるし可申候。唯今迄脇差帶候事不成程之者には、脇差計り差免し可申候。尤刀脇差は一代切、苗字は子孫迄名乗らせ可申事。

一高持之内にても厄介等も多候者などは、身上取續兼子細を承届、吟味之上其持高により年貢差免可申事

一正直にして行狀宜しく、諸人のためにも相成候者、右同前に候事

一百姓町人右同様に候。但町人は刀差免候儀は無用に候事

右百姓町人之内、勝而孝行なるもの、又は格別正直に農業無懈、諸人のために成相應に人之見次をも致し、惡敷者には異見等をも加へ遠近之者迄も風俗直り候段、他領迄も沙汰に及び候程のもの於有之者、遂吟味可被申聞候。子細承届候上、右書付之通被仰付にて可有之候條、其趣を可被存候、已上

享保五年庚子十月

「日本財政經濟史料」(卷二、二二八、二二九頁)

(九) 「銀台遺事」二二頁、中村忠享編「肥後孝子傳前後編」國中すべて士は元より農工商に至るまで、孝悌惇朴力田精勤

の者あらば、其支配々々より官に以聞すべき旨、寶曆六年令あり。其善行を換聞して賞賜あり。(「官職制度考」二〇一頁)

(一〇)「奇特者御褒美苗字帶刀御免有之し近例」として「地方凡例錄卷七」(四二五—四三八頁)に詳細に特記され、「日本財政經濟史料卷二」(二四〇—二四八頁)にも亦引用されてゐる信州高伊郡小見村百姓太右衛門も、苗字帶刀御免の理由の中に「至而孝行にて格別の儀」といふことが數へられ

てはゐるが、なほその他に「先年より身上相應にて酒造等商賣仕」「水難等之節は度々米穀差出相救」「居村近郷へも手當いたし」といふやうな、即ち寸志的篤行が、また有力な理由であつたことが察せられる。

(一一) 強訴押留の功により苗字帶刀許可、明和七年四月「御觸書新四十七、舊政府御達留八」(「日本財政經濟史料」卷二、一九六・七頁所引)

六

殘された途は寸志による昇進である。寸志は諸地方で冥加、上げ金、用立金、御才覺上納などと稱せられ、肥後藩の記録ではしばしば入賃といふ文字が同様の意味に用ゐられてゐる。例へば「入賃勤功藝術等ノ士族卒調」「入賃士族」「入賃二代目郡代直觸」などのやうに。寸志といふ言葉は元來は藩帑への金穀獻納そのことを意味し、やがては之に對する賞美として苗字帶刀御免その他身分上の殊遇を被る人々をも寸志又は寸志もの寸志の者といつた。民間で蔑稱と言へないまでも一種の揶揄的稱呼として金上殿、金上侍などとも言はれた。(註二)他藩では金郷士又は獻金郷士などとも稱せられたといふ。俄侍といふのもこの類であつたであらう。(註三)

かゝる意味の寸志制度は何時の頃から始まつたのであらうか。或る人は寸志による郷士取り立てを「細川家の

中世に於て家臣堀平太左衛門勝名と云へる人の發議に係ると言ふ。」と述べ、更に他の人は「寶曆の改革に當り、堀平太左衛門の建策によるといふ口碑が残つてゐる所から考へると、其の頃が最も多かつたのではなからうか」と推量してゐる。(註三)事實はそれ以前からあつた。然し何故寸志制度の起原がかやうに堀平太左衛門と結びつけられるに至つたのであらうか。當時の藩主は細川重賢公(天明五年二四四五年薨)で、紀州の徳川治貞公と共に天下の二名君として、紀州に麒麟、肥後に鳳凰と歌はれてゐた。その下に居て獻替の功多かつたのが家老堀平太左衛門勝名(寛政五年二四五二年歿)であつて、この賢君醇吏によつて諸般の藩制が完備し、特に疲弊してゐた藩の財政が建て直された。これを肥後藩では「寶曆の改革」と呼び慣らしてゐる。寸志の起原もかゝる事情と結びつけられたのであらう。「當時の行政が貧民救助又は借金棒引を命じ、之を寸志に立て士の段階を與へられた事は、如何にも妙策であつたと感ずる」と「制度考」は述べてゐる。

その上寶曆の改革に當つては、盛んに人材の拔擢登用が行はれた。即ち「すべて此頃より、人の器用をゑらびて、あながちに祿の多少、族の盛衰によらず。元より士たらんものは、いふにや及ぶ。緒方何がし田添某といふものは、農民なりしかども、其道に委しかりければ、侍となして、領内の勸農を司らしめ、後は所領をも給ひたり。かゝる類あけてかぞへがたし。」(註四)中でも最も破格の拔擢を受けたのが堀勝名自身であつて、「小姓組の頭に勤仕しけるを、用人に移され、いく程なく寶曆二年七月、ぬけ出して大奉行になし給ひけるより以來、一國の仕置、此人とはからひ給はざる事なく、遂に中老を経て家老になし賜ひて、三千五百石に至り、國の政事を委任

し給ふこと、凡三十年計」(註五ノ二)であつたが、「堀大夫の事、他國にては足輕より御取立被成父祖は無名無刀の人、人有つると專申觸候」(註五ノ二)と言はれるやうな特別な事情とも聯想されたかも知れない。なほその頃肥後藩以外にも一般に農民の稱氏帶刀が少くなかつたと見えて、享保年中(二三七六—三三九六年)「以來一統無筋目百姓苗字相名乘儀、急度御停止被仰出」(註六ノ二)爾來寛延三年(二四一〇年)十一月幕府は重ねて農民の濫りに氏を稱し刀を帶ぶるを禁じ、越えて安永二年(二四三三年)五月にも稱氏帶刀の農民處理方を定め、その他之に關する禁令がしばしば發せられてゐる(註六ノ二・三・四)などのことがあり、これら國內一般の政治的經濟的社會的諸事情とも廣く照らし合はせて、その起因が明かにされねばならない。

兎もあれ寸志制度の起原は右の所謂寶曆改革の時代よりも早い。寛永十一年(二二九四年)即ち細川氏肥後入國第三年、既述の一領一足などの地侍が設けられたといふその年に定められた寸志規程が残つてゐる。『公儀御手傳又は非常之凶荒等格別之筋につき僉議之上寸志差上之儀被差免、現金銀米銀御藏御銀所へ相納め候ものは、錢五貫一口の當りを以て新に御扶持方被下置御加増をも被仰付、新たに御藏入米をも被下置御藏米御加増をも可被仰付、其外連席御賞服且輕輩より士族にも可被仰付候事。』右は寛永十一年宛めとして『在中寸志格例』中にあり、(註七)細川公治下に於ける寸志制度のはじめであると考へられる。然し肥後入國以前の細川氏にかやうな制度が無かつたか、また細川氏入國以前の肥後にその濫觴が無かつたかは、今はなほ問題として後に残る。(註八)

この『在中寸志格例』中にも示されてゐるやうに、寸志としての金穀獻納は、一般に「公儀御手傳」のためであ

り、また「非常の凶荒等格別の筋につき」差上げられたのであるが、その事例を更に舊記中より拾へば様々の場合があつた。「江戸御館類焼寸志」「江戸表出火、龍ノ口御屋敷御類焼の節寸志」といふ例はしばしば見出される。

「上野寛永寺御佛殿建立御手傳」「増上寺御靈屋御手傳」「日光御手當」「關東川筋御普請御手傳御用」「相州御備場御用」「御軍器御買上ケニ付」「炮器御製造」「太守様御入國の節且又御婚禮の節」「若殿様俄に江戸御發駕の節」「若殿様御出府の節」などは特別な使途が明示された「公儀御手傳」の場合であり、「御才覺寸志」「至極無御據御用に付才覺銀指上」「御勝手方御用」「御手當米代寸志」「御預潰寸志」などもあり、また「何町火災之節」「何村洪水之節水請塘石垣修築料」「何村目鑑橋御普請入目の内」「麻疹流行ニ付貧民救助として」「饑饉に付飢人救助として」などのやうに「非常の凶荒等格別の筋につき」謂はゞ社會事業的使途のための獻納もあり、一般に「貧民御取救御用」「貧民生産料として」「至貧中引立方として」或ひは「民力强として」はその例が最も多い。

極めて特殊なものとしては「學校（藩營時習館）御造營の硯書籍二部（資治通鑑綱目全百二十一冊二函、康熙字典全四十冊六帙一函）指上」といふのがあり、また直接に藩帑への獻納ではなく民間に於ける借金棒引とも言ふべき「在中より典物に取置きし種粃並諸穀類（代銀拾壹貫八百目餘）凶年に付在中に貸渡」「借財質地捨方」「貸付置候錢辻捨方」等があり、更には直接に自家の榮進を求めて「奉願寸志金五十兩指上」けたり、「願之旨有之寸志銀拾貫目指上」けたりしてゐる場合も見られる。また一度寸志等によつて郷士となつた者が隱居したり死亡したりした場合には、無條件にその跡が相續せしめられたのではなく、跡目相續のためには一定額の「繼目の寸志」がその際に

もしくは豫め必要とされたのである。

それでは如何なる寸志の額が如何なる郷士の段階を約束したのであらうか。たとへば地士などは前に述べたやうに、庄屋として在勤六十年餘、やうやくにして到り得ることもあつたといはれるが、之に達するためにはどれ程の寸志を必要としたのであらうか。

その前にしかし凡そ郷士なるものの段階は如何様に分けられてゐたかを、明かにして置くが便利であらう。今までも地士とか一領一足とか御中小姓列とか、郷士の段階を示す幾つかの名稱をあげたことがあり、その若干に就ては多少内容にも觸れたのであるが、ここに一應その全體の序列について見通しをつけて置くこととしよう。

註(一) 山田熊三郎氏「制度考」四、五頁

大竹虎雄氏「舊熊本藩の郷土制度」(農業經濟研究第一卷第三號一六一頁)

(二) 「水戸藩史料」(日本經濟史辭典「金郷士の項」)

菅野和太郎氏「日本會社企業發生史の研究」四九五頁

(三) 前者は兒島貞熊氏「陣内志談」一七丁裏、後者は山田氏「制度考」四、五頁

(四) 高本紫溪翁「銀台遺事」一一頁(肥後文獻叢書「第一卷所收」文中、田添某とあるは、田添源次郎定斯。微賤より身を起して、郡横目、郡吟味役等を勤め又藩内の田地を整理し、寶曆七年より明和六年まで十三年間に及ぶ。仍て食

祿百石を賜はる。寛政五年八月歿す、享年七十。(「肥後人名辭典」)

(五ノ一) 「銀台遺事」 九頁

(五ノ二) 「銀台遺事」 七〇頁

(六ノ一) 「地方凡例錄」卷七、四二三頁

(六ノ二) 寛延三年午十一月帶刀苗字禁制の再告、「牧民金鑑八」「地方凡例錄卷七」(「日本財政經濟史料」卷二、一〇三四—六頁)

(六ノ三)

一、苗字帶刀いたし候百姓之事

諸國村々にて苗字帶刀御免之者、仕來區々に候間、苗字帶

刀御免之者は、以來宗門人別帳、御年貢米札等、苗字名前を認、都而壹人にて兩名不相名乗、御年貢は勿論役儀外之儀は、村役人之差圖請候様、銘々御代官所當分御預所村々へ可被申渡候

右之外、先年より村々に致住居、苗字帶刀致來候郷土等は仕來之通いたし置、若及出入候事有之候者、其節由緒得と糺之上可被相伺候、以上

安永二年癸巳五月

〔日本財政經濟史料〕卷二、一〇三九頁所引)

七

苗字も有たず小脇差の一本も身に帶びることの許されてゐない百姓を、假りに、純粹の或ひは單なる百姓と言ふならば、苗字を稱へたり小脇差を帶びたりすることが許されることは、既に郷土への一步をはつきりと踏み出したことになるであらう。然し郷土の域に辿り着くまでには、その前に幾つもの小刻みな豫備的段階が横たはつてゐた。

葦北郡水俣手永の推定文久年間略手鑑一紙によねば、竈數一五二三竈、男女合計六六六八人の中に、傘御免といふ人達が三十八人、吉凶禮之節麻上下小脇差傘御免といふ人が一人、御惣庄屋直觸といふのが都合八人、その中で苗字の無いのが四人、苗字御免が同じく四人。次に御郡代直觸といふのが十八人。その上に居るのが地士九

(六ノ四) 享和元年(二四六一年)七月百姓町人稱氏帶刀の禁

令、〔天保集成廿二、令條秘錄四〕(同右卷二、一〇五八頁)

(七) 熊本縣廳「在中寸志格例」(内村氏「肥後藩に於ける金納郷土制度」所引)

(八) 久住郷土は今日の大分縣直入郡久住村、當時の久住手永に居住してゐた「寸志の者」「入貫士族」であつたが、それが置かれたのは貞享の頃(二三四四——二三四八年)と傳へられてゐる。(大竹虎雄氏「舊熊本藩の郷土制度」農業經濟研究第一卷第三號)

人、一領一疋十二人、諸役人段六人、御目見醫師一人、御留守居御中小姓席一人である。

その中で傘御免といふのは百姓ではあるが、雨中には傘をさして差支へないものことである。江戸時代の農民が、政治家からも學者からも一樣に農は國の本なりと稱せられながら、實際は如何に低い生活標準を強いられるたかを、今こゝに繰り返して説くことはすまい。それはすべての近世農村史や農民史が説き漏らすことのないかつた點であるから。此處ではただ「一傘合羽下駄木履菅笠不成事」「一脇差傘合羽菅笠ノ類直ニ取揚候旨」「官職制度考」などといふ禁制があつて、如何に雨が降らうと雪が積もらうと傘もさせず合羽も着られず菅笠もかぶれず、雨具とてはたゞ蓑と竹の皮笠、履き物も下駄木履など思ひもよらず、草履か草鞋かはだしかのほかし方になかつた老幼男女が、人口六千六百何十人中六千五百何人かであつたことを指摘するに止める。雨中に傘がさせる、木履がはける、僅かこれだけのと思はれる特權が公認されるのは、一つには前にも一言したやうに、村吏としての多年の勤功に對する嘉賞としてであつた。村庄屋としては十五年以上の、「山の口」としては二十年以上の、頭百姓としては實に四十年も以上の。しかもその特權は家長一人だけ。これを家族にも及ぼすためには、更にそれ以上に長い勤めが必要とされた。即ち三十歳で頭百姓に擢んでられた村の實直有爲な器量人が、七十の坂を越えて初めて一本の傘をさし得た日の喜びの姿を想ひ見るとき、私達は、彼に象徴される農民的人生の哀樂に深く心を打たれずには居られない。

傘と木履の他に祭禮や葬式などかどある時に限つては麻上下の禮服に威儀をただし、小脇差一本をも帶びるこ

とを許されてゐるのが、一紙中に吉凶禮の節麻上下小脇差傘御免とある一人である。彼がもし後に述べるやうな寸志獻上の途を選んだのでなかつたとすれば、彼は庄屋としてならば既に二十一年以上、山の口としてならば二十七年以上、頭百姓としてならば實に四十五年以上もの職歴を経てゐるものでなければならなかつた。しかし村役人に選ばれる程の器量と幸運とに恵まれるのは小數の百姓であつて、大多數の百姓達は、傘を手にする喜びも木履をはく嬉しさも遂に知らないまゝに、決して自らを呼ぶ苗字をも有たないまゝに、世を去らねばならなかつた。

其處にしかし寸志の途がひらける。勤功幾十年の結果を、寸志は直ちに彼の眼の前にもたらしてくれる。「此節被仰付候寸志繼目又者段上り并御扶持等より段々傘御免迄望多可有之、若間違之錢高ニ而有之候ば尙申談、多少によらず望も可有之、寸志空しく相成不申相立候様に可申談事」といふ前書きに續いて「一傘御免百五拾目以上、一傘小脇差御免三百目以上、一禮服傘八百目以上、一家内不殘時々伺傘御免（寸志額記載なし）」。これは享和二年（二四六二年）預りの寸志規矩の一部である。（註ここれより少しづゝ値上りになつてゐる規矩、「一傘御免二百目、一傘小脇差五百目、一家内傘菅笠五百目、一麻上下傘小脇差一貫目」といふのは註こ恐らくこの歳よりやゝ後の究めであらう。ともあれ右二つの規矩によれば傘御免は百五十目か二百目かである。それが頭百姓として四十年、村庄屋としてさへ十五年以上の勤功に報いられた特權をあがなひ得べき寸志額である。銀六十目金一兩といふ元祿八年（二三五年）幕府公定金の銀相場によればそれは三兩内外である。三兩といへば、例へば世事見聞錄に言ふ、「譬へば給金三兩を取る下男奉公を致しても、其三兩は當時の相場に積りては米八九俵に當るなり。

在所に於て小作など致しては、八九俵の半分も取がたし。給金の三兩は取安し。其上身も樂なり。」註三勤功と寸志とこれど果たして權衡を得て居たのであらうか。とにかく寸志は若き百姓にも傘と木屐を與へ、麻上下をまとはせ小脇差を帶びさせる。更に一貫目以上(享和二年)もしくは一貫五百目以上(文政十二年)の寸志は、彼をいはゆる御惣庄屋直觸に昇格せしめる。御惣庄屋は手永の長である。手永の語原については諸説があるが、いづれにせよ行政區劃としての手永なるものは、細川氏の治下を通じて豊前にも肥後にも行はれた。肥後では寛政九年細川氏入國と共に、從來の郷が手永に、大庄屋が惣庄屋に、改稱された。そして肥後藩十四郡が、時により一二手永の廢合はあつたが概ね五十一手永に分かれたれ、一手永は普通二・三十ヶ村から成り立つてゐた。これより遙かに小さな手永もあつたが、大きい方では七十餘ヶ村を含み、高二萬六千石餘を超えるものもあつた。惣庄屋は郡代(郡宰とも記される)の下に一手永を統べたのであるから、中には七十餘ヶ村の庄屋達を支配する者もあり、格式は兎に角、地方に於ける實際の勢力はかなりに大きかつた。初めは惣庄屋は御山奉行を兼帶することが多かつたやうであるが、後には概ね代官を兼帶し、御山奉行は獨立して御山支配役と改稱された。惣庄屋の知行は概ね二三十石、中には百五十石といふ異例も數人あつた。註四村庄屋の直接配下たるに過ぎなかつた平の百姓が昇格して、この御惣庄屋直觸となるのである。

然しそこでもまだ苗字を名のることは直ぐには許されなかつた。それが無苗御惣庄屋直觸である。苗字が庶民に禁止されたことは既に觸れたところであるが、苗字を許されるといふことが如何に重大な意味を有つたかは、

寛永十一年將軍家光が京都に上つた時、特に大阪に入り恩威ならび施さんとし、故老を招いて、願ふところ必ず許すべしと號してその欲する所を聞いたのに對して、三老は苗字を以つて唯一の願ひとし、直ちに聽許されいたく光榮として喜んだといふ、淀屋にからむ言ひ傳へによつてもうかがはれる。世が降つてそれ程ではなくなつたまでも庄屋や山の口でさへ四十年五十一年以上の勤功がなければ許されなかつた苗字であるが、寸志ならば一貫五百目(享和二年)か二貫五百目(文政十二年)によつて許されたのである。苗字御惣庄屋直觸がこれである。

恩賞として刀は苗字より一層重かつた。この段まではまだ小脇差が許されるだけで、大小兩刀を帶びるには、更に一段を昇らねばならなかつた。また苗字帶刀御免の場合にも、苗字は家族に及ぶ場合にも帶刀は本人限りとか、或ひは苗字は子々孫々まで許されても、帶刀は本人一代に限るといふ場合が少くなかつた。註五

苗字御免御惣庄屋直觸からいま一段を昇ると御郡代直觸となる。單に御直觸とも言ひ、郡宰直觸とも誌す。郡政大尉直觸といふ呼び方は明治初年になつてからのものであらう。郡代は各郡に一人又は二人、計十八人、二百石高知行取の藩士で、郡方奉行の指揮を受けて擔當郡の郡政一般を統轄した。(註六)「惣庄屋已下の黜陟進退政府の命を奉て指揮す」といふことになつてゐたが、實際は殆ど郡代の考とほりになつたものであらう。「御郡様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」といふ俗語が行はれたといふことによつても、その權勢の程が察せられる。この御郡代直觸の段では、稱氏と共に兩刀を帶びることが許された。この段の者は在中でも他の諸段階の者に較べて人數も多く、殊に後世になるほどその増し方も著しかつたやうである。この段で侍らしい形は一應

整つたやうではあるが、普通に「おぢくれ」と言はれて、この段あたりまでは手永の中でも餘り尊敬されなかつたとも言はれてゐる。(註六ノ二) 百姓からこの段に昇るための寸志額は、二貫五百目以上(享和二年)乃至四貫目以上(文政十二年)であつた。

その上が地士又は地侍である。この名は廣く郷士一般の汎稱として用ゐられることもあるが、また郷士中特定の一段階の名稱でもある。そしてこれからが本來の在中御家人となるのである。例へば推定文久年間久木野手永略手鑑一紙中には竈數二三三軒の内譚として社司一軒、御家人九軒、御郡筒二二軒、御百姓二〇五軒、〇〇一軒と記されてゐるが、その九軒の御家人に含まれるものは、御山支配役(在勤中諸役人段)一軒、一領一正三軒、地士五軒であつて、御郡筒新舊合せて二十二軒はその外に置かれ、御直觸二軒は御百姓中に加へられてゐる。その他の諸手永略手鑑類の一紙でも、人口を三通りに大別して、第一類寺社、家内共、第二類家人並に郡宰直觸、郡筒、家内共、第三類影踏帳衆としてゐる場合が少くない。(註七ノ二) 影踏帳衆は、切支丹宗門改めのため年々影踏或ひは踏繪を行はせられた一般の村百姓であり、郡宰直觸とその家内とは、この影踏帳衆の中には含められてゐないが、明かに家人の外に數へられてゐる。然し稀れには、無役家人の中に、諸役人段・一領一正・地士と共に郡宰直觸を含めた記載例も無いではなく、その場合には惣庄屋直觸・惣庄屋支配浪人・郡筒舊古・同新・札筒などが、御家人の下に列記されてゐる。(註七ノ三) 百姓より地士たるためには、寸志三貫目以上(享和二年)乃至五貫目以上(文政十二年)を要した。

その上が前に兵・農複合の典型的な郷士として多少の説明を加へた一領一疋であり、この段から鑑一領軍馬一頭駕籠一乗を許され、これ以上は「地方でも相當の尊敬を受け且權威もあつた」ことは上述の通りである。御山支配役(寶曆改革以前には御山奉行と稱せられ、惣庄屋兼帶のこととあつた)や惣庄屋兼代官などには、この段の者から選任されることが多かつたが、惣庄屋や御山支配役在勤中は諸役人段に差加へられ、その勤功によつては諸役人段本席に加へられることもあつた。百姓より一領一疋への寸志は六貫目(享和二年)乃至八貫目(文政十二年)であり、金一兩銀七十目の比價を以てすれば、百兩乃至百三十餘兩に相當する。百兩といへば、「今五百石の武士は一ケ年百兩の暮方は出来兼ねるなり」といふ「世事見聞録」の言葉も思ひあはせられる。數多い郷士の諸段階が一領一疋で一應上下に分けられたやうに見えることは、前にも指摘したが、(本稿第四節)それはまた寸志額によつても察せられる。即ちこれ以上の又は以下の諸段階に於ては、寸志額の差等は比較的小刻みに定められてゐるが、一領一疋への寸志のみは、その前段地士への寸志に較べて一躍倍額となつてゐる。然しこれだけの寸志を獻納しても、直ぐこの段階に昇れたのではなく、「やはり下より順次上位に進んだので、この間相當な年月を要し、一領一疋以上になるには三四代を経なければ出来なかつた」とも記されてゐる。(註八)また單に金穀獻納だけでなく、相當の武藝文藝の修得等も顧慮されたらしく、家系書や相續願書等にしばしばそれらの造詣の程が書き出されてゐる。服制などもその直ぐ下の地士とは差別されてゐた。特に家柄の古さ故に尊ばれたといふ舊古地士とさへも區別されてゐた。(註九)

一領一正の上は、順次に諸役人段、歩小姓列、獨禮、歩御使番列、士席浪人格、御留守居御中小姓列、御留守居御中小姓席、御留守居御番方を経て御知行取席へと進む。これらの名稱は本來概ね城下に於ける家士又は輕輩の席次を示すもので、これらの「本席」に準ずるものとして「格」又は「列」等があつたのである。これらの在御家人は知行所は固よりのことであるが、扶持も受けないものが多かつた。例へば御留守居御中小姓列にしても、ただその座席を許されるだけで、「御扶持方不被下置者」が普通であつたが、文化三年の「御留守居御中小姓列より御藏米百石。九拾五貫目」といふ寸志内規に示されてあるやうに、寸志によつて永代相續知行取の席に差加へられることもあつたのである。（徳富家「内分記錄」）この御知行取席が郷士の系列の最高に位する。この段は「近世に至りて設けられたるもの」であつて、「重代相續の士格にして、寸志昇進の極度とす。郷士は此以上に進むことを許されず。」（「陣内誌談」）こゝに至つて輕輩の域を脱して士族の段階に列し、所謂御藏米の御知行取りとなるのである。御知行取席の内でも、なほその上に二十七貫目以上の寸志を加へることによつて、「御藏米百石之人尙百石御加増」のことも行はれた。（「内分記錄」）更に寸志を重ねて加増される途は閉ざされては居なかつたと言ふが、今はそれに要した寸志の基準を明かにせず、且つ在方にあつては甚だ稀有の例に屬するものであつたであらう。

因みに役と席とは異なる。役は官職に、席は位階にも當たるであらう。「一國一家の内」にても、役と席との二つはさすがに定められずしては、事整ひがたかるべし。されば此家中には、家老、備頭杯の役席の外は、昔より大概

段格を四品に分つ。着座、物頭、平士、輕輩といへり。君（重賢公）の御時に、夫が中の等級をわけて、着座に上中比あり。物頭は元來足輕五十人の頭より、十人の頭まで次第す。平士は所領あるものと、中小姓といふものと違ひあり。是を大概にして、輕輩まで、程々の等級を定めらる。其役を命ぜられて、其席につくは、常の事なり。或は席上りて役下り、あるは役上りて席下り、又は其職に適ひたるものは、役をかへずして席をすゝめ忤せられしかば、選舉の道自在にして、大方は其人其職に適へり。〔銀台遺事〕右にあげた郷士の諸席次は概ね家中の輕輩の諸席次に當たり、郷士中最も高い席次のものが、家中の平士中の比較的下級に相當したのである。そして家中でと同様に在中でも席と役とは分別され、席を同じうして役異り、或ひは役を同じうして席を異にするなどのことがあつた。例へば、席は等しく諸役人段であつても、或る者は御山支配役を、他は御惣庄屋を、更に他の者は唐物拔荷改方御横目を勤めた如き、また御買上薪見締といふ同一の職に就きながら或る者は一領一正の席に他は諸役人段の席に居たなどの如きである。（註一七）

百姓から士席へ連なるこの系列は、こまかく見れば之でつくされて居るのではない。等しく浪人といつても、士籍浪人、士籍浪人格、輕輩浪人、御惣庄屋支配浪人などの差別があつた。諸手永一紙に於て士席浪人格は歩御使番列よりも上席であるが、御惣庄屋支配浪人は概ねそれより七八段も低い御惣庄屋直觸の次席に記されて居る。輕輩浪人はその中間で一領一正の次座に附けられる定めであつた。その他それらの段階にも重代のもの、一代限りのもの、或ひは更に短く特別な職務在勤中に限られるものなどの別があつた。例へば御郡代衆御手附横目唐

物拔荷改方御横目在勤中諸役人段、紙楮請込在勤中又は御米船改方請込在勤中地土、楮楮見締在勤中郡代御直觸などの類である。

その他御郡筒をこの系列中に數へる人がある。(註一〇)それによれば御郡筒の位置は御郡代直觸の下、御惣庄屋直觸の上であるとされる。諸手永略手鑑一紙にも概ね御郡代直觸の次席に記されてゐる。郡筒のもので多年の勤功によつて郡代直觸に仰付けられた事例もある。またあらたに御郡筒に召し加へられるための寸志がもしそれら諸書の示すやうに二貫五百目であつたとすれば、その點から見ても大體こゝに位させるのは妥當であらう。(註一一)御郡筒はしかし明かに御家人ではなかつた。當時の諸記録にも常に區別されてゐる。稱氏帶刀を許されてゐたこと、宗門改めの影踏から除かれて居たことなどから見て、明かに村人數から放れては居たのであるが、その家内は、少くとも蘆北御郡筒に於ては、なほ村人數なみに影踏を必要とした。御家人に於ては本人は固より家内共影踏から除かれてゐたが、御郡筒に於ては後世寸志によつて家内共影踏免除の途が開かれてからも、その特權を受けるに要する寸志高は百姓家内共に於けると同額であつた。然し同額であることに對する異議の申立も御郡筒の側から出た程であるから、その位置は寧ろ御家人と御百姓との中間にあつたのであらう。然し御郡筒は郷士たる身分上的一段階、即ち一つの席といふより寧ろ一種の役として扱はれて居るかに見える場合も無いではない。即ち席としては、御家人より始めて御郡代直觸、御惣庄屋直觸、吉凶禮之節麻上下小脇差御免、傘御免などに至る序列に記し、御郡筒はその中には含まれてゐない。そして別に御惣庄屋兼代官を始め、手代、下代、會所詰ニ而

村帳書兼など所謂會所役人の人々を列記した後に御郡簡が擧げられてゐる場合がある。然し元來は役名職名であつたとしても、泰平が永く續いて見れば平常定まつた職務も少かつたので、いつとはなく一種の席的な意味を多分にもつやうになり、郡簡で居て會所手代、下代、下御番所下御番などの諸役を勤めるやうにもなつたのであらう。その意味で御郡簡もまた廣義の郷士の身分的一段階と見ることはあながち不當ではないであらう。たゞ前にも述べたやうに、その成立は特別な歴史を有ち、その機能も元來特殊な技術を要するものであり、且つその他の郷士的段階と違つて、なべてもの郷士が昇進してゆく普通の過程の中に一度は經由すべき一段階ではなかつた。即ち之を御惣庄屋直觸の上、御郡代直觸の下に位せしめるとしても、前者から後者へ昇段する際に必ず踏まねばならぬ中間段階でなかつたことは明かである。

註(一) 徳富家「内分記録」

(二) 栗林家舊記(内村氏前掲論文所引)

(三) 「世事見聞錄」七六頁

(四) 津下剛氏「肥後藩の手永制度」(經濟史研究第三四號)

「官職制度考」一二六——一三四頁

「桃元問答」(熊本市史「四二」頁所引)

(五) 「其身一代苗字帶刀御免、子孫迄苗字可相名乘旨命セ

ラレタリ」等の例が多い。例へば「地方凡例錄」卷七。

將軍家光による大阪豪商の稱氏御免、竹越與三郎氏「日本經濟史」四卷五六六頁

(六ノ二)

郡代。十八人、二百石高、職料二十苞。

邦國郡政の事を、郡方奉行の指揮を奉て行ふ。勸農力田孝悌淳朴の風化を誘導き、貢租調備產物の豐約賦歛逋欠魚塩陂池築堤溝洫濕澤山林貨財義倉委積廩藏九穀都て民間利弊の政令を掌り、惣庄屋已下の黜陟進退政府の命を奉て指揮す。(「官職制度考」一、一二六頁)

(六ノ二) 「制度考」五頁。「おちくれ」といふ言葉は信州の

「おちろく」「おちぼう」などと關係がありはしないか。(早川孝太郎氏「所謂おちぼうのこと」社會經濟史學二ノ二)長

州では「おぢくろ」と言ふ由。

(七ノ一) 深水家舊記類例へば明治三年「佐敷手永略手鑑」

(七ノ二) 同右の内、明治三年「葦北郡水俣手永略手鑑」

(八) 「制度考」八・九頁

(九) 在居住獨禮以下澁張日傘相用候儀不苦候哉、且葦北舊

古地土之儀は一領一疋同様に衣服不苦候哉之儀御制度見締

御家人中より伺儀に付相伺候處、在居住獨禮以下澁張日傘

相用候儀難叶、且又舊古地土たり共一領一疋之衣服者難叶

旨候條、左様御衛屋場家人中には不洩様御通達成候。以上

安政四年己九月九日附御家人中への通達（葦北郡誌二三

五、六頁所引）

(一〇) 兒島貞熊氏「陣内志談」及び之に基いた中山太郎氏

「農民の階級と民俗」（民族）第四卷第十號及び第十一號）

(一一) 郡筒への寸志が二貫五百目であつたことは、右の諸

書に見える外、「明治五年下益城郡宇土兩郡從前宇土地筒

取調」記録や「明治二年入貨勤功藝術等之士族卒調」中にも

見出だされる。例へば

南關郷原村居住從前郡筒木村甚兵衛改名

一卒

木村 七三郎

右者父木村甚左衛門と爲申者南關郷柳原村人數二而御座候

處、文政十亥十一月王藥料として寸志錢貳貫五百目差上申

候處、代々相續郡筒ニ被召抱（下略）

以上傘御免から始めて百姓が在中の郷士としてとり得る最高の段階御知行取席までを列擧した。次にその諸段階に上るのに要する寸志額を表示しよう。但しその「規矩合」には、私が寓目したものだけでも、幾通りかの異つたものがあり、互に多少の出入りが認められる。時代が降ると共に寸志額は遞増の傾きがあつた。寛政度に較べて明治二年には十倍に激増してゐる。

寸志規矩合の第一は、葦北郡津奈木手永御惣庄屋徳富家舊記に見えるもので、享和二年（二四六二年）預りとなつてゐる。第二は阿蘇郡小國郷北里手永御惣庄屋北里家舊記に見えるもので、文政十二年（二四八九年）の日附がある。（内村氏前掲論文所引）第三は八代郡種山手永郷士山田家舊記中のものである。山田家所傳の規矩合はそれ

を輯録した「制度考」中には年代が示されてゐないが、「無苗御惣庄屋直觸一貫五百目以上」から「土席浪人格十八貫目以上」に至るまで全く北里家のそれと符合して居るので、大體同年代のものと察せられる。たゞ北里家のそれに見えない御留守居御中小姓、御留守居御番方、御知行取席といふ高段が加はつてゐるので、或ひは北里家のそれより幾分新しいものであるかも知れない。菊池郡合志地方に傳へられた規矩合は「陳内志談」に記された限りでは、諸段階の初めと終りの幾つかに就いて寸志額をあげるだけで、中間諸段階のそれが多く漏れて居、その出所も年代も記載されてゐないが、擧げられてゐる限りの寸志は、北里家のそれと概ね一致するので、此處には省略する。第四は上益城郡矢部手永御惣庄屋布田家舊記中のもので、明治二年の日附がある。これは特に寛政度以降明治二年に至るまでの規矩の變遷とその理由とを明かにしてゐる點が注目される。

寸志に對する賞服連席

寸志規矩合

	享和二年		文政十二年		明治二年改正前		同改正後	
	(徳富家舊記)	(北里家舊記)	(布田家舊記による推定)	(同上)				
傘 御 免	百五十目以上	(二百目)	三百目以上	一貫五百目以上				
傘 小脇 差 御 免	三百目以上	(五百目)	六百目以上	三貫目以上				
禮 服 傘 御 免	八百目以上	(一貫目)	一貫六百目以上	八貫目以上				
無苗御惣庄屋直觸	一貫目以上	一貫五百目以上	二貫目以上	十貫目以上				
苗字御免御惣庄屋直觸	一貫五百目以上	二貫五百目以上	三貫目以上	十五貫目以上				
苗字帶刀御郡代直觸	二貫五百目以上	四貫目以上	五貫目以上	二十五貫目以上				

地	士	三貫目以上	五貫目以上	六貫目以上	三十貫目以上
一領一正	六貫目以上	八貫目以上	十二貫目以上	六十貫目以上	
諸役人段	九貫目以上	十貫目以上	十八貫目以上	九十貫目以上	
歩小姓列	十二貫目以上				
獨禮	十三貫目以上	十五貫目以上	二十六貫目以上	百三十貫目以上	
歩御使番列	十七貫目以上				
士席浪人格	十五貫目以上	十八貫目以上	三十貫目以上	百五十貫目以上	
御留守居御中小姓		(二十貫目以上)			
御留守居御番方		(二十五貫目以上)			
御知行取席		(三十貫目以上)			

右の内文政十二年度規矩合中傘御免より禮服傘御免迄は、同年頃のものと思はるゝ栗林家舊記（内村氏前掲論文所引）により、また終りの方の御留守居御中小姓以上御知行取席に至る三席は、これ亦同年頃のものと推定される山田家舊記（「制度考」所引）によつて補充した。明治二年改正前矩規合は、寛政度の二倍といふ布田家舊記により、享和二年のそれを寛政度のものとして算出したものであり、同年改正後のものは同じく寛政度の十倍といふ記録に基いて算出したものである。

なほ享和年度規矩合の後書きとして「右何れも庄屋に而候得は是迄之見合を以減方有之候事。但時々伺候は別

而宜有之候事。」とあるから、右の基準は平百姓からの寸志額を示したものであり、且つ基準そのものは必ずしも時々變更されたのではなかつたとしても、個々の場合によつて多少の斟酌がなされ得たであらうことを示唆してゐる。

この規矩合の中で最も古いのは、享和二年（二四六二年）附のものであるが、それまでには寛永十一年（二二九四年）即ち細川公治下の肥後藩に初めて入質の郷士制度が設けられたといふ年から、既に百數十年を経過してゐる。果して寛永度のそれは如何様に定められたのであらうか。またその後諸制の改革が斷行された寶曆中（二四一一—二四二三年）寸志の規矩には少しも手が附けられなかつたのであらうか。ともあれ後世「寸志御賞美規矩之儀寛政度御議定ニ相成」（布田家舊記）とあり、寛政（二四四九—二四六一年）に直ちに引續く年代が享和（二四六一年—二四六四年）であるから、右の享和二年預りと稱するものは、恐らく寛政規矩そのものではないであらうか。ところが「其砌は米價壹俵三拾五匁之見極ニ而被建置事ニ候處逐年米價騰貴付而は當時一倍に被仰付置候。」（同右）かくて寛政度に較べて一倍に——私達の言ひ方では二倍に——増額されたのは何時の頃であつたらうか。右表示中の文政十二年の規矩は寛政度のそれと思はれるものに較べて一割乃至六割内外が増額されてゐる。二倍となつたのは更にその後のことであらう。現に天保（二四九〇—二五〇四年）嘉永（二五〇八—二五一年）の頃まで、右の規矩によつて累進してゐる事例がある。然しその後もなほ米價の騰貴は止まるところを知らず、寛政度の寸志額を倍加しても、當時に於ける米價と寸志額とのつりあひに較べて「猶權衡を不得候ニ付、

此節會議之趣有之、向後は寛政度之規矩合ニ十倍増ニ被仰付旨候」(同右)と一躍十倍に増額されるに至つた。それは明治二年のこと、やがてかゝる制度そのものが廢止される直前であつた。

ところで、これらの寸志額は銀目であつたと思はれる。當時の貨幣の呼方として、兩・朱は金、貫・匁は銀、貫・文は錢の單位である。のみならず關東は金目本位であつたが、關西・西國は一般に銀目を本位としてゐた。然し寸志の事例中にも、明かに「寸志銀」「才覺銀」「御用銀」「銀子」「米銀」など銀であることを明記してある場合は問題はないが、寧ろ「米錢打込」とか「錢五貫六百三拾四匁貳分四厘」などと錢の文字が用ゐられてゐる例が多い。この場合は現銀でなくて現錢であつたであらう。然しその價額はやはり銀目であつたと思はれる。貫匁分厘毛などとなつてゐるから。銀錢の比價は極めて變動の多いものであつたが、「官職制度考」によれば、肥後に於ては元文中(三三九六——二四〇一年)錢七十文を以て銀一匁と定められて以來、同書編纂の文化十年頃まで約八十年間、この銀一匁七十文當といふ公定相場が、その時々實際の銀錢相場に關係なく維持されたと思はれる。

註二三 寸志錢貫匁とあるのは、この公定の銀錢相場によつて銀目に換算して現錢を獻納したものであらう。この比價によつて右享和二年の寸志規矩合を換算すれば、傘御免は錢十貫五百文以上、苗字帶刀御免御郡代直觸は百七十五貫文以上、地士は二百十貫文以上、一領一疋は四百二十貫文以上となり、明治二年改正以前はその二倍、同改正後はその十倍となつたと考へられる。

更に寸志事例中「寸志金」「金子」「金六百兩」などとあるのは、現金による獻納である。金銀の比價も極めてし

ばしば且つ複雑な條件によつて變動を免れなかつたが、幕府の公定相場ともいふべき金一兩銀六十目替によつて一律に換算すれば、右享和二年寸志規矩合は、苗字帶刀御免御郡代直觸四十一兩餘、地士五十兩、一領一疋百兩となり、明治二年改正規準は、假りにこの儘の比價によれば、その十倍、即ち地士五百兩、一領一疋一千兩となる。然し明治元年及び明治二年の寸志事例中に百兩六百兩等の獻納があり、それに附記されて「此金御双場壹兩ニ付而百貳拾目替」といふ比價がしばしば示されてゐるので、之によれば右の金目も半減するが、それでもなほ地士二百五十兩、一領一疋五百兩、獨禮ともなれば一千一百兩にも近かつたのである。(註一四) それらの金額は本來の武士生活にとつては如何なる意味を有つたであらうか。「世事見聞錄」は寛政三年(二四五一年)の頃に筆を起こしその後數年にして成つたものと言はれて居るが、先きにも述べたやうに「今五百石の武士は一ケ年百兩の暮方は出來兼ねなり。」と言ひ、或ひは「右の手代なるものの給金五拾兩、百兩乃至百五拾兩、貳百兩も取者ありて、武士の三百石、五百石の餘にも當る。」とし、更に「金千兩は、三千石餘の武士の一ケ年の所務に當る也。」「當時千兩は、三千石高の御役人の取高」などとも記してゐる。五百兩、千兩或ひはそれ以上の寸志獻納をなし得る餘力を有つてゐた農民の富力を想察しうるであらう。

然しかくも複雑に分けられた在御家人達の座席、在中一代の精進・數代の努力を積んで辛うじて購ひうるところの郷士の身分も、之を御家中に例べると、おしなべて寶曆度六段階中の概ね第六段階に過ぎず、更に一層精しく封建的身分制度を反映してゐる明治二年制定の官等序列「坐班式」に於ては、九段階中の第八・第九段階に屬し

それ以上に屬するものは寧ろ甚だ珍らしかつたのである。しかし田舎侍・金上侍・輕輩・在郷兵衛などと、本來の封建的特權層から蔑視されながらも、富農の財力はその驥足を次第に展ばして行つた。それは在中に於てだけでなく、次第に封建制度の牙城に迫つて行つた。寸志によつて郷士となるものの數が次第に多くなつたのみならず、郷士として許される座席の最高の限界も徐々に押上げられて行つた。

また凡そ通婚の範圍は、身分や階級の區劃を測る有力な一目標であるが、郷士の通婚が次第に家柄の高い御家中との間に可能となつて來たこと、それが追々と藩廳にも公認されるに至つたことは、(註一五)家柄御家中の謂は、私的な封建的社會意識に於ても、また藩廳によつて表現されるところの謂は、公的な封建的社會意識に於ても、郷士の地位が次第に高まつて來たことを示すものである。それは一面に於ては豪農や豪商の地位が昇つて來たことを意味し、他面に於ては生粹の侍の地位が降つて來たことをも意味する。封建的階級組織の崩壊と維新的四民平等制の展開とは、此處にもまた準備されつゝあつたのである。

因みにこれらの寸志額と米價との關係を見れば、「米價壹俵三拾五匁之見極」といふのが、寛政度寸志規矩合の基準となつたと記されてゐるがその後も變動が斷えず、明治二年には暴騰して、當時の寸志事例中にも「米壹俵五百目、安賣米壹俵代三百六拾五匁」とあり、寛政度の米價に比して、普通賣値は十四五倍、安賣の値さへ十倍以上となつてゐる。(註一六)明治二年に寸志規矩合が一躍十倍に撥ね上つたのは、固よりこの物價高に伴つたものであることは明かであるが、同時に郷士の濫立を抑止しようとする意味もあつたのであらう。

右の寸志額は庶民より郷士に召加へられる場合に必要とされる最低基準を示したものである。それは必ずしも一度にまとめて献上されたとは限らず、相當長い年月にわたり事ある毎に度々獻納されることが稀れではなかった。そしてその合計が右の基準に達した時、賞美として相當の座席が許されたのである。

一度或る座席を許されたものが重ねて昇進せしめられるためには、更に新しい武功や勤功や寸志やが追加されねばならなかつた。寸志に就て言へば、右の基準に示された寸志額の概ね差額を献上することで事は足りた。例へば文政年度規矩合に於て一領一疋は八貫目以上となつてゐるが、これは純粹の農民からの昇進に要する寸志であつて、一領一疋の一段下の地士から之に昇進する場合には新たに八貫目を必要とせず、地士五貫目との差額の三貫目で差許される類ひである。

註(一三)、「當國は錢は七十文を一匁と定めらる。寛永より寛文頃迄は何十何何文と數へ文目の數なし。(中略)寛文元祿寶永の間錢一匁と云は五十或は六十或は七十八十を以て一匁とす。定れる事なかりしが銀一匁の寶買五十六十七八十の時は其直段につれて定りたる事なし。享保の初年銀一匁八十錢の時又一匁八十とす。(中略)元文中銀一匁七十錢の時に一匁を七十錢と定められしより、今に至りて八十年の間七十錢と定る。予寶曆の末年に生れ明和の初頃よりの事を覺へて心に留めしが、銀一匁八十七八文乃至九十文、安永の頃より九十文已上九十一二文なり。天明中に九

十五六文になる。寛政中に九十八九文より百二三文になる。享和中百六七文より百十文已上になる。文化十年頃百十九文。予先人の嘶を聞に、享保より以前は銀六十七十の事なりと云り。今に至迄年々に高くなる、いかんともしがたき勢なり。」〔官職制度考〕二二二—二二三頁

(一四ノ一)

享和二年寸志規矩合を、一匁七十文替にて錢貨に、また一兩六十匁替にて金貨に、それ〴〵換算すると次のやうになる。

寸志賞美として
の連席
(錢貨に換算)
(金貨に換算)
上

無苗御惣庄屋直觸
七十貫文以上 十六兩餘以上

苗字御免御惣庄
百五貫文以上 廿五兩以上

屋直觸
百七十五貫文以上 四十一兩餘以上

苗字帶刀御免御
二百十貫文以上 五十兩以上

郡代直觸
四百二十貫文以上 一百兩以上

地 士
六百三十貫文以上 百五十兩以上

一領 一疋
七百貫文以上 百六十六兩餘以上

諸役人段
九百十貫文以上 二百十六兩餘以上

歩小 姓 列
一千五十貫文以上 二百五十兩以上

(一四ノ二)

士席浪人格
他藩の寸志額を参照すれば、紀州に於ては左の通りであつたといふ。

座 席
平民より同
の獻金額 嘉永四年改 同
安政六年改 上

平 地 士
百兩以上 二百兩以上 百五十兩

御代官直支配
二十兩以上 四十兩以上 三十兩

代々 同 斷
四十兩以上 八十兩以上 六十兩

年頭御目見之節
二十兩以上 四十兩以上 三十兩

熨斗目着用御免
(下略)

嘉永四年(二五一年)の倍額値上げは地土激増を防止しよ

うとするものであつたが、それではまた高きに過ぎるとの理由で安政六年(二五一年)再び改められたものであらうと言はれてゐる。なほ平地士へ拔擢されるための勤功は、大庄屋胡亂改としては二十年以上、杖突帳書としては二十五年以上、庄屋肝煎としては四十年以上であつたといふ。阿波藩では「文政十三年(二四九〇年)八月奥頭庄屋を郡代所へ召出し、極密に『國恩冥加として金子獻納の者には、其額に應じて相當の身居仰せ付くべき旨、上意なれば精々説き諭し獻納致さすべし』と郡代官より申渡し、更に内密にて配布したりし身居相場書下の如し。

- 一 夫役小高取格 千三百兩
- 一 夫中小高取格 千兩
- 一 夫外郡附浪人 七百兩
- 一 一夫中郡附浪人 五百兩
- 一 壹領 壹匹 五百兩
- 一 所役人支配外無役人苗字帶刀 四百兩
- 一 無役人苗字帶刀 三百兩
- 一 無役人 脇差 二百兩
- 一 本人惣領夫役脇差御免 百五十兩
- 一 其身一人夫役脇差御免 百兩
- 一 一郷附浪人 二百兩
- 一 一頭入之儘苗字帶刀一家夫役御免 三百兩

一頭入之儘脇差一家夫役御免 二百兩
 一頭入之儘本人惣領脇差夫役御免 百五十兩
 一頭入之儘其身一人脇差夫役御免 百兩
 一頭入先規奉公人苗字帶刀御免 五十兩
 一寺院境内殺生禁斷 二十兩

左の五株は不仰付候

一給知頭拔 一御目見得 一小高取 一寺院神主
 山伏等御郡代直當 一頭入之儘小高取格郡附浪人一領一匹
 郷附浪人等之身居。」

(以上いづれも中山太郎氏「農民の階級と民俗」(一)「民俗學」第四卷第十一號所收に據る)

(一五) 徳富家舊記「内分記錄」

(一六) 肥後に於ける米價變動に就ては「官職制度考」一九七

— 一九九頁參照

(一七) 角力の司家たる吉田追風翁の談話によれば、肥後に於ける藩士並に輕輩等は次のやうな段階に分けられてゐたといふ。——足輕で「一番身分の低いものを「長柄」といつて刀一本としてゐた。長柄は明治維新の前に鐵砲組となり苗

字帶刀を差許された。その上が「外樣組そとようぐみ」。それから「側組そばぐみ」、行列の時など君公の身邊に近く詰め、楯または弓、鐵砲を持たしめられる。その上が「諸役人團」。(團は段の誤りであらう。次の徒士團中小姓團も同様。筆者附記)これは機密の間の書記役で、一名「觸組ふれぐみ」ともいふ。詰小姓も「觸組」の仲間である。それから進んで「徒士團」。これは「徒小姓」の仲間である。それから進んで「獨禮」となる。「獨禮」となると「お使番」の資格が出来、その上が「中小姓團」である。それから進んでは「藩士」となり「物頭」「著坐」の順序で上り得た。「著坐」は「侍頭」「番頭ばんがしら」「備頭びやうがしら」を總稱し、現在の隊長長のやうな役目を持つ。「奉行」もまた「著坐」のうちであるが、「著坐」の上位は「大奉行」といひ、藩士は「大奉行」まで昇進することが出来た。「大奉行」の上が「家老」で、「家老」には「附家老」「中家老」「大々家老」の區別がある。その上が藩主である。(大々は代々か。筆者附記)

(故本山社長傳記編纂委員會編纂「松陰本山彦一翁遺稿」六五、六頁)

相續に就いて。

庶民が郷士に召加へられるのは、全く賞美であり恩典であつて、決して權利としてではない。且つその賞美はその身に限られるのが原則である。之が子孫に傳へられるのは決して當然の相續ではなく、これまた新たな一つの賞美としてである。即ち郷士が病氣や老齡等のため御役向を完うし得なくなつたといふかどで隠居を願ひ出で、それが差許されると、郷士たる身分は召上げられる。そして被相續者たる親に特別な功績があつて、それに對する賞美が子にも及ぶ程であるか、或ひは相續者たる子自身に何か新しく賞美を受くるに値ひする行ひがあると認められた場合に限つて、郷士たる親の跡目相續が許されたのである。それは親や當人の武功勤功などにもよることがあつたが、後世になるに従ひ寸志による場合が益々多くなつて來た。

親跡相續を期待してなされる寸志を繼目の寸志・繼目銀・繼目錢などといふ。それは親によつて子のために豫め獻納されることもあつたし、子自らによつてなされることもあつた。従つて「從前士席浪人格何某、繼目寸志無之一代限跡目平民」「從前士席浪人格當代何某、跡目、平民、繼目寸志錢四貫餘ニテハ餘計ノ不足ニ付其儘捨ノ筈」などといふ事態もあつたのである。

繼目寸志の額は時代によつて變化があつた。

一一 領臺定

但當時迄ハ二代目貳貫目ニ而引繼被仰付旨ニ候得共右引繼ハ士席浪人格以上同様ニ而ハ乍恐不對ニ御座候間引繼臺ノ目被

仰付置被下候様ニ有御座度存候事

一 地士並御郡代直觸

但右同斷七百目ニ而引繼被仰付被下候様有御座度存候事

一代壹ノ目當り此節迄被仰付置被下様有御座度存候事

右は文化三年(二四六六年)蘆北郡代より藩廳に對して寸志につき願ひまたは伺ひに及んだものの一節である。

之によれば當時士席浪人格も一領一疋も地士も御郡代直觸も繼目の寸志は一樣に二貫匁であつたらしい。(註二)この願ひは聴き届けられなかつたやうで、その後二十數年を経た文政十二年(二四八九年)にもなほ「士席浪人格以下御總庄屋直觸以上繼目の寸志二貫匁」とあるから、このきまりは原則としては相變らずそのまゝに行はれて居たやうである。ところがその後十二年を経た天保十二年(二五〇一年)には無苗御總庄屋直觸錢二貫目より御留守居御中小姓席錢十五貫目に至るまで一々の段階に應じてそれぞれ異つた繼目寸志の額が定められて居り、(註三)之と同一標準と思はれるものが更にその後三十年間近くひき續き行はれたのである。即ち明治二年(二五二九年)に「是迄民力強繼目寸志規矩合調別紙之通」として總庄屋から村々庄屋中への達に

一 貳貫目	無苗御惣庄屋直觸	一 六貫目	一 領 一 疋
一 三貫目	苗字御免御惣庄屋直觸	一 六貫五百目	諸役人段
一 四貫目	御郡代直觸	一 七貫目	步御小姓列
一 五貫目	地 士	一 八貫目	獨 禮

一九貫目

步御使番列

一拾三貫目

御留守居御中小姓列

一拾貫目

土席浪人格

一拾五貫目

御留守居御中小姓席

といふ定めが見える。(註三)

然しかやうな繼目の寸志などを要しなくても相續せしめられる場合もあつた。即ち「先祖の譯に被對代々相續被仰付」場合があつたことは既に舊族郷土を説明した際に觸れた通りである。(第三節特にその註五)それは元來家格が特に高かつたものや、また特に勳功の著しかつたものやに對する殊遇が、その子孫に及んだものであつた。然し後世になると、寸志によつても永代相續が許される場合が生じた。「此節之儀ニ付是迄寸志ニ仍而段式被附置候面々右寸志之高一倍此節差出候者其段式は永代相續ニ可被仰付旨御内密之趣承知仕候。依之左之通奉伺候」として各段階に就いて詳細な伺ひが文化三年蘆北郡代から藩廳へ差出されたことは既に一言した通りであるが、それに對して一々回答が與へられてゐる。それによると一領一疋や地土や御郡代直觸などの繼目の寸志が土席浪人格以上と同様に二貫目であるのは不均合であるから、一領一疋は一貫目に、地土と御郡代直觸とは七百目に減額していたゞき度いとの願ひは聽き届けられなかつたらしいが、數代にわたる繼目の寸志が先納される場合には、いくらかづゝ割引きされることが回答されてゐる。即ち

土席輕輩共々席已上繼一代貳貫目之宛ニ御座候處此節先納仕候はゞ左之通

一三代相續

四貫目之處三貫五百目

一四代相續

六貫目之處五貫目

一五 代 相 續

八貫目之處七貫目

一六 代 相 續

拾貫目之處九貫目

一七 代 相 續

拾貳貫目之處拾壹貫目

一八 代 相 續

拾四貫目之處拾三貫目

一九 代 相 續

拾六貫目之處拾五貫目

一十 代 相 續

拾八貫目之處拾七貫目 (註四)

十代は即ち重代であり永代である。

永代相續は座席のみでなく扶持や知行に就ても仰付けられた場合がある。

一 拾貫目一口之當リニ而寸志差上候はゞ其御扶持方永代相續之事

一 御藏米之御知行茂右之句配ニ而代々無相違相續可被仰付事

右の内示に對して御郡代より次ぎのやうな意見書がさし出されてゐる。即ちこの節は座席永代相續よりは御扶持方永代相續を希望するものの方が多くであらう。ところで拾貫目一口の當で永久に御扶持方相續を仰せつけられては「後年に至餘り結構過申様にも相見可申哉。」よつて十貫目一口當永代といふことでなく、それより少々づゝ減じて三代とか五代とか代數を限つて相續せしめられては如何か。且つはその方がかへつて寸志の高も増加するかと考へられるといふのである。御藏米の御知行相續についても同様の進言がなされてゐる。そして「右代數之内は家柄之御士と婚姻之儀も被差免置候様」との希望をも加へてゐる。之に對して藩廳も同意したもののやうで、左のやうな寸志の標準を與へてゐる。

壹 人 扶 持	三 代 相 續	四 代 相 續	五 代 相 續
	六 貫 目	七 貫 目	八 貫 目

貳 人	扶 持	拾 壹 貫 目	拾 貳 目 目	拾 三 貫 目
三 人	扶 持	拾 七 貫 目	拾 八 貫 目	拾 九 貫 目
四 人	扶 持	廿 四 貫 目	廿 六 貫 目	廿 八 貫 目
五 人	扶 持	廿 九 貫 目	卅 壹 貫 目	卅 三 貫 目

御藏米の御知行については

一 御留守居御中小姓列より御藏米百石

九拾五貫目

一同御中小姓

百 貫 目

一 組付御中小姓列

九拾五貫目

一 御藏米百石之人尙百石御加増

廿七貫目以上

右の内御留守居御中小姓にて御藏米百石を御知行として賜はるに要する寸志百貫目は、之を金一兩につき銀六十目替の相場にて換算すれば千六百六十六兩餘となる。

更に一方、定規通りに進んだのでは一躍上席には昇れないといふ事情と、他方、郷士として席はかなりに高くても家計が豊かでない等の事情と相待つて、いはゆる株養子なるものが郷士の世界にも行はれた。それは最も家格に驕つた旗本に於てさへ、しかも關ヶ原役を距ること僅か六十年にすぎぬ寛文年間に既に始まり、逐年甚だしさを加へ、禁令頻りに發せられて遂にその效がなかつたくらいであり、(註五)地方の諸藩士・家中の侍に於てさへその例が乏しくなかつたといふ事であつて見れば、郷士特に寸志者の間にかゝる現象があつたとしても敢て異と

するには當らない。即ちそれは名目は養子であるが、實は郷士格の賣買であつて、寸志が謂はゞ藩廳との直接取引きであるに對して、株養子は謂はゞ民間の取引きが、養子なる擬装の下に、藩廳によつて認められるといふ形をとつたのである。

藩廳が初代寸志の額や繼目寸志の額を引上げたのは、一面藩帑の増收を計ると共に、他面郷士の激増を防止しようとしたものと考へられるが、次ぎのやうな養子相續に關する制限も亦、士席の引續ぎを限定しその増加を防ぎ品位を保たうとしたのではなかつたであらうか。

士席浪人輕輩ヨリ致養子相續ノ者ハ輕輩浪人ニ相心得候様トノ儀ハ、享和二年八月及御達置候通ニ候得共、一代御中小姓ノ子弟ヲ致養子相續ハ士席ノ御取扱ニテ被召置候處、以來一代御中小姓並士席浪人格ノ子弟ヲ致養子候共、士席引續ハ難叶輕輩浪人ノ御取扱ニ被仰付旨ニ候。最是迄相續相濟居候面々ハ今ノ通ニテ被差置候

(天保六年)五月四日

(註六)

註(一) 徳富家舊記「内分記錄」中、文化丙寅年四月、内密書付ニ付而從是願又候。

(二) 北里家舊記(内村氏前掲論文所引)

(三) 布田家舊記。右内村氏所引の北里家記錄に見えぬ歩御使番列と士席浪人格とが、布田家の分には見える。その他は同様である。

(四) 「内分記錄」

(五) 「世事見聞錄」二〇—二四頁、藤井甚太郎博士「株養子」
「歴史地理」第四四卷第四號)、同博士「家格の賣買」(新舊時代第一年第二冊)、喜田貞吉博士「士族の株の賣買」(民族と歴史第九卷第四號)、山田熊三郎氏「制度考」二三・二四頁
(六) 「制度考」九・一〇頁

九

郷士の機能はかなりに多面的であり多角的であつた。現に郷士であるものに制度上表向きに營ませられる機能が、相當に多岐にわたつたのみならず、かゝる制度の陰に郷士が營む機能も様々であつたし、更に爲政者の側から言へば、百姓町人を郷士にすること、また郷士への機會を與へて置くこと、之を百姓町人の側より言へば、郷士となること、また郷士となる機會が與へられてあること等に伴ふ、諸方面への社會的效果をも併せて考へる時その機能はかなりに廣汎なものであつた。封建時代に於て、郷士といふ社會圈ほど複雑な社會的機能を營んだものが、他にあつたであらうか。それらの機能は、或ひは郷士制度の制定者や、または郷士たらんとする者乃至現に郷士である者などによつて、意圖されたもの、或ひは意圖されないまでも少くとも豫想されたものであることもあつたが、また郷士制度の制定者も郷士自身も凡そ豫期しなかつたやうな機能で、しかもかなり重要なものがあつたと考へられる。

先づ現に郷士であるものが、平常郷村に於て制度上に營ませられた官職とも言ふべきものに就て見れば、郷村役人の上層は概ね彼等によつて占められてゐたので、郷村事務は殆ど皆彼等によつて直接に執行されるか、或ひはその指揮の下に營まれた。例へば法令の諭達實行を始め、人別改め・宗門改め・風俗取締り・旅人出入検査・徒黨一揆の防止・營業取締り・盜難豫防・犯罪人の捜査收捕及び水火防禦等の諸警備事務、民事に關する司法事務、年貢・課役の配賦徵收、道路・橋梁・河川・堤防・溜池及び用水等に關する土木事務、蟲害驅除・猪鹿防禦及び作物改良等の勸農事務、共有地事務、初穂・祈禱・祭禮等の祭禮事務、凶荒儲蓄、棄兒行倒救助等の救濟事

務より更に家督相續・遺産讓渡・養子・廢嫡・家屋賣買に干渉し、勤儉の獎勵、不孝・放蕩無賴の教戒にまで及んだ。(註)實際の役名としては、總庄屋兼代官が最も包括的な機能を營み、その他御山支配役・御山見締役・御制度見締役・烏亂者見締役・唐物拔荷改方横目・拔米見締役・御買上薪見締役・御買上炭見締役・御買上楮見締役・櫛方御用楮楮見締役・寺推御用掛・井樋見締役・御番所番士・寺院改影踏受持・馬口勞者取締役・塘堀川架橋等諸工事取締役などがあり、會所下役人たる手代・村帖書なども比較的下級の郷士が之に當つた。明治初年には、文武世話役・武藝倡役・武藝稽古所見締役・銃隊引廻・銃隊教方・鼓長・勸農倡役・御買上炭薪見締役・櫛方見締役などが、「役附家人郡箇名前」中に見出される。

これらの人々の中には、職權を濫用した者もあつたであらうし、奢侈贅澤の故に譴責された人々も實際に無いではなかつた。「在中風俗不宜、今以て下役人執計之内不直之儀も有之趣相聞え候」(「銀臺遺事」)といふのは、あながち重賢公入國當初のこととは限らなかつたであらう。然し「靜謐の御代」が兎に角數百年間も續いて來たのであるし、また明治の革新を契機としてあれだけの躍新を成しうるだけの潜勢力が民間にも培はれてゐたのであるから、それらの秩序保持者として、また潜勢力培養者として、彼等の日常的なじみなこれと言つて特筆するほどでもない働きの連續は、一概に閑却されてよいものではなかつたであらう。古來記錄は善きにつけ惡しきにつけ兎角異常なことのみを保存し易い。郷村の役人に就ても同様である。彼等は神の如き姿か、でなければ惡魔の如き姿に於てのみ描かれる。けれども平凡な然し必要な職務を、平凡にしかし社會の必要を満たしつゝ、履行して

來た彼等の業績を、私達は相當に高く認めねばならない。のみならず特筆に値ひする功績さへ決して稀れではなかつた。「或は海邊を開きて田地を造り、或は山野を造林して水源をつくり、或は運河、或は溝渠を通じ、而して或は學校を設け、良師を聘して郷黨の子弟を教育する等」の功績は諸方に口碑としても記録としても残つてゐる。總庄屋を徳とし歿後そのために地方的な祭日を設けたところさへある。(註二)

郷士の中でも一領一疋・地士・郡筒・地筒などは、平常それぞれの身分に應じて武具を備へ武技を練り、一領一疋は特に軍馬一疋をもかねて用意せしめられた。彼等は平時對內的にも對外的にもその地方の治安維持の機能を營んだと共に、一朝事ある時は何時でも動員されうべき在野的兵力であつた。現に寛永十四年から十五年(二二九七・八年)にわたる切支丹一揆に對する天草島原の陣にも參加して相當の武勳を建て、居り、その後十餘年を経て正保四年(二三〇四年)ポルトガル使節が鎖國の禁令を犯して長崎に入港した所謂「正保黒船來朝」の際も、文化五年(二四六八年)イギリス船が長崎に闖入し奉行松平康英が自刃した等の時も、更に幕末諸外國艦船が頻りに來朝するに當つても、長崎其の他の沿岸防備に當つて殊功があつた肥後勢の中に彼等は加はつて居たのである。(註三)また周邊の諸藩に對する邊境防備力として隱然たる存在であつたことは既に指摘した通りである。これらの郷士と鹿兒島藩の外城武士とは、固より種々の相違あるを免れないが、その制度の意圖に於ても、實際の機能に於ても、かなりの共通性が存在したことは否定されない。尤も旗本や諸藩家中の士でさへ泰平に慣れて、その武藝が形式化し裝飾化する傾向が著しく、武藝の免許も情實や黄金をめぐつて授受される弊が歎かれるやう

な時勢となつては、郷士のみが全くその例外であり得た筈はない。従つて黒船打拂ひの爲等に動員さるゝに當つても、裝備その他に若干の混雜を免れないものがあり、^{註四}郷士の先祖附や相續願の類に數々書き出されてゐる彼等の武藝の造詣の程も、「三寶に山なす程に」あつたといふ「皆傳目錄の卷物」なども、悉くその額面の儘に受け取ることは危険であらう。然し「常に浪人抔を圍ひ置て身分に非ざる武藝を習ひ」などすることが、痛歎されたり、法令によつて頻りに禁止されたりしたことからも察せられるやうに、また現に郷士中に「三代武藝諸役人段」と言ふやうな者が居て、今に武藝の諸目錄を傳へてゐるだけでなく、自ら劍道の指南をしてゐたなどの例もあり、^{註五}更に本稿(一)郡簡の項に於て述べたやうに「月々砲術稽古打」も行はれ、また奉行、郡代、番代、代官等臨席の下に諸武藝の仕合なども定期に實施された^{註六}などのことによつても、また明治維新に彼等の中から、文武世話役・武藝倡役・銃隊引廻・銃隊教方などが任命されたことによつても、彼等の武藝が決して一概に有名無實なものとは限らなかつたことがわかる。兵農分離以來、専ら城下に集中された武具と武技とをそしてそれに伴ふ武士的精神と教養とが、或る程度まで彼等によつて郷村に移植され培養されたのである。

その他城下に獨占され勝ちな諸文化を郷村に導き入れたものも主として郷士達であつた。凡そ文武の門に出入すること自體が、この人々の階級的名譽心を満足させ、一般の村方に對して自家の身分を誇示する所以でもあつたし、また郷士も相當の段になれば、一應文武の藝術を修得してゐることが、拔擢や相續の一條件ともされたのである。これらの文化的機能も見方によつては、武藝と同様に「身分に非ざる」ことも見えたに違ひない。現に

「或は師匠を撰みて詩文章を志し、唐様を書き和漢の書畫風を學び、又は茶湯師歌俳諧師音曲の藝者杯を抱へ置て遊藝を學び、我遊興の相手とし」とて、之を指揮してゐる者もある。(註七)如何にも彼等が移入したものの中には、都會文化の類廢面も無いではなかつたであらうが、固よりそれが全部ではなかつた。頼山陽や高山彦九郎や吉田松陰や其の他城下や他國の名士が肥後の南端を通過した際に、藝術にせよ經世にせよ、彼等と共通の話題を有ち得た者は、やはりその地方の御目見醫師や諸役人段や一領一正などの人々であつた。その中の一人は、山陽來遊當時十九歳の青年であつたが、山陽と月見の舟を浮べた時、蘇東坡赤壁の遊びを話題とし即座に之を和歌に詠んで山陽に膝をうたせたと言ひ傳へられてゐる。(註八)當代の文豪山陽の前に自己の才華を誇示し、その讃辭を深く名譽とした青年郷士の才識と稗氣と自負との程を、まのあたり見る思ひがされる。

其の他學校を設け、或ひは自ら教鞭をとり、或ひは遠く教師を聘して郷黨の子弟を教育した等の事例は決して乏しくはない。(註九)かくてそれらが民間武力として、また民間文化力として、明治維新達成の方向に營んだ役割りは没却すべからざるものがあつた。來るべき國民皆兵、國民皆學への水先案内的任務を果たしたものと見てゐるであらう。これらは總じて郷士の士的機能と言ふことが出来る。

然し郷士の社會的機能に於ける重要さはこれに盡きない。寧ろかゝる士的機能と共に非士的機能・農工商的機能をも併せ行つたところにその獨自なる意味がある。それは郷士の制度上の機能ではない。然し郷士が藩士でなく郷士であり、家士でなく家人である限り、當然豫想されてゐる機能である。

郷士のすべてとは言へないまでも、その中には、特に寸志による在中御家人の中には、富農が少くなかつた。

彼等が富農となつた理由は様々であつたが、「身上能百姓は田地を買取彌よろしくなり、身體不成もの令估却而猶々身上成べからざるの間、向後田地永代賣買可爲停止事」といふのは寛永十二年の布達であり、その後土地兼併がしばしば禁ぜられたことは、却つてそれが盛に行はれたことの反映でなければならぬ。しかもかゝる富農の土地兼併は如何にして可能であつたであらうか。「世事見聞録」の著者は明かに之を擧取として説明してゐる。

「一體右に云ふ如くの福有は元は皆小前百姓より絞り上たるものにて、他所より取得たる福有には有べからず。」

「村役人始め福有なるもの、又は産業其外賣買利潤の道に入し民、右の如く奸智になりて上たる人をすら犯し欺く程なれば、目下なる右の愚昧の小前百姓をば犯し掠むる事思ひやるべし。殊に右體の奸智なる者は世上を斗る上ケ金冥加金等を以て役人へ誑し懸け……。」「國家の寶とは農民の事なり。金持は世の潤澤を犯し奪ふ大罪人なり」^{註一〇}、然しこの過程を一層具體的に説明してゐるのは「勸農策」である。「在方一統困窮仕候内に、間々は豪農の者も相見へ候。是は如何にして富有に相成候ぞと申に、耕作計にて身上仕出し候にては無御座、多くは酒油商店質屋等に御座候。一向無商賣の者も皆金貸しを仕り、其利息を取て手前よく相成候にて御座候。」^{註一一}

葦北郡諸手永略手鑑によれば、各手永には概ね荷物問屋、船問屋、造酒本手、質屋等が數軒づゝあり、夫々他の一面に於て概ね郷士としての身分を有つてゐた。彼等が富を蓄積したのは、單に農のみによつたのではなく、寧ろ酒の醸造、製紙、製絲、製油などの工業や、諸問屋、質屋、金貸などの商業や、船元、網元などを營んだことに

よることが少くなかつた。即ち近世在中寸志の御家人をして御家人たらしめた直接の因由は、必ずしも軍事的な或ひは農的な機能ではなく、反つて比較的後世になつて兵農的機能の上に附け加はつて來たところの、且つ封建的意識に於ては最も輕視され或ひは白眼視されたところの、商工的機能による富の蓄積である場合が少なくなかつた。近世の在中郷士が單に兵農の複合とのみ見られないと言ふ所以である。町方寸志の者は勿論のことである。

幕末、封建的身分組織が亂れて、百姓町人から武士となるものが多かつたといふやうな記述が、諸書に數多く見えるが、郷士に關する限り、これは表現の正確を缺く。百姓や町人が百姓や町人の身分を離れて武士となつたのも絶無ではないが、それは既に郷士ではない。郷士である限り、彼は依然として百姓や町人でありながら、同時に武士的格式を得たのである。封建的意識に於て最も高貴な武士的身分——それは武的價值、それもただ本人一代の武的價值だけでなく祖先傳來の傳統的な武的權威とのみ結びつくべきものと考へられて來たところのもの——が、封建意識に於て最も卑賤な貨幣——それは米麥其の他生活必需の衣食住的資料そのものより遙かに低劣な、私利私欲の象徴に他ならないと考へられて來たもの——によつて購はれたのである。この最も高かるべきものと、最も低かるべきものとの結合は、潔癖な封建意識にとつては、堪へ難いものであり、その誇りを傷けることも激しかつたに違ひない。「金上侍」「俄侍」などの言葉は、端的にこの感情を表してゐる。「世事見聞錄」の寸志者に關する記事は、封建的義憤の代表的なものであらう。

さて彼等が侍の座席を與へられるに至つたのは、それらの商賣その他庶民的職業のせるであつたとしても、そ

のお蔭で侍になつてしまへば、もはやその職業を營むわけに行かぬ。然し藩としては彼等に悉く知行所や藏米を與へるなどの財政的餘力は固より無い。また彼等の農工商的機能を停止することは、藩格の財源を一層枯渴せしめるだけである。彼等自身としても、殊に幕末に近づくに従つて、輕輦や平士の末席やに召し加へられて、たとひ封祿が與へられたとしても、その代りに本業たる農工商的機能を差し止められたのでは、却つて「算盤が持てぬ」であらう。そこで侍の席には連つても、農商等の機能は續けねばならず、従つて百姓町人としての身分をも保留して置かねばならない。かくて「官府よりも兩端に相成」「其身分々々に取り候ても兩端に相成」「今更如何様とも一方に落着は六ヶ敷御座候」(註二二)といふ如き事態を生ずるのである。この郷士の兩端的二重的性格を最も鮮かに示すものが所謂「家代」である。彼が御家人の格式に立ち、御家人的な機能を營む時、例へば諸役人段であつた唐物拔荷改方御横目や御山支配役などの郡政に携はる時、即ち御家人社會の一員たる時には、侍らしく苗字も通稱も名乗りも有つてゐた。然し彼が平民として平民的機能を營むのには、それでは都合が悪かつた。そこで家代が必要となる。例へば新酒屋昌次郎と言ふが如き。これは酒造業を營む平民的身分に於けるこの家の代々の通り名である。それは廣義かどな(門名)の一種とも考へられる。そして「諸國村々にて苗字帶刀御免之者：役儀外之儀は村役人之差圖請候様」(安永二年癸巳五月)といふ達があり、庄屋などの村役人の差し圖を受ける時、即ち平民社會の一員として活動する際には、無腰でこの家代を名のる。それは「一體兩勤」とも記されてゐる。(註二三)

この一體兩勤的な性格故に、郷士は封建主義的な家士から蔑視され、また封建的イデオロギーを反映する限り

に於て在方の人々からさへ「金上殿」などと揶揄されるのを免れなかつたとしても、彼等自らとしては、地主的な或ひは市民的な實利を完うすると共に、武士的な或ひは準武士的な權力や名譽をも幾分かは併せ享受することが出來たのである。否、かゝる權力や名譽だけでなく、それらに値する武士的な教養と訓練と、従つて武士的な精神と技術とを兼ね有することが出來たのである。

「我朝上古ノ制海内學テ兵ナラザルヘナシ。有事ノ日 天子之カ元帥トナリ 丁壯兵役ニ堪ユル者ヲ募リ以テ不服ヲ征ス。役ヲ解キ家ニ歸レバ農タリ工タリ又商賣タリ。」(明治五年徵兵令渙發の際の告諭)上古に於けるかかる兵と農工商との一致は、一致と言はんより寧ろ未分である。然し郷士に於けるそれは、明かに分化せるものの複合であり統一である。しかも郷士に於てこそ兩種の機能は複合してゐるが、一般に武士は武士、庶民は庶民としてそれ／＼一面的機能を營んでゐたのであるから、武士的社會圈と庶民的社會圈とは、正に郷士を契機として交叉したのである。空間的に言へば、それは正に城下と郷村との交叉であつた。交叉點に立つ郷士の中には、兩社會圈の短所をのみ攝取したものもなかつたとは言へない。然し兩者の美點を併せ生かすに至つた者もあつたに違ひない。それは、その個人にとつての禍福を意味するに止まらず、郷村のためにも一般に社會國家のためにも、決して無意味な事態ではなかつた。明治維新の變革期に際して、それはみごとにその特徴を發揮して來たのである。

(二ノ二) 「下益城郡中山手永惣庄屋矢嶋忠左衛門は、水利

には尤も心を勞し、緑川の堤防工事など大分大袈裟に永久的の仕事もしました。天明天保の飢饉に鑑みて、米の貯藏法なども研究したもので、はるばる人を羽前の米澤までやつて、上杉鷹山侯仕置ききの濕氣と害虫をよく防ぐ箱倉を見學させ、工夫を加へてそれを中山郷に建てました。好い醫者がなくてはならぬと、人を選擧して江戸長崎に遊學させました。農家の出身で出來の好い一人は、姓を中山、名は高慢であつてはならぬと子謙と名のらせたものです。天然痘の流行した時、西洋流の種痘を中山郷では逸早く實施しました。(中略)舊中山郷の民は忠左衛門の歿後約七十年の今日に到るまで年々記念の矢嶋祭をして、嫡孫矢嶋一藏は杉堂から主賓として招待されて行くのであります。」「竹崎順子」一〇五—七頁

(三) 武藤長藏博士「西曆一六四七年長崎に渡來の荷國使節に關する肥後細川家所藏、正保黒船來朝記。」
「細川全記」「綿考輯錄」「古事類苑」外交部等

(四) 深水家舊記

(五ノ一) 「一領一疋、矢嶋」彌平次(吉保)の嗣子矢嶋忠左衛門直明は、寛政六年の六月(上益城郡)杉堂に生れ、(中略)十八歳の時、熊本に出て、安野形助、大木太十郎を師として四書五經、史記左傳以下の漢文を、星野龍典、和田

傳兵衛を師として武藝を習ひました。擊劍、柔道、弓、槍、鐵砲などの皆傳目録の巻物は、三實に山なす程にありました。父の物好きと子の熱心から醫術、卜筮の事まで學びました。和歌なども好んで詠むだものでした。」「竹崎順子」一三頁

(五ノ二) 津奈木郷先祖帳六番三代武藝諸役人段

苜北郡中村 六車 和 七郎

明治三年庚午閏十月士族ニ相定候 舊名 大八

(津奈木村役場「無祿世襲士族名錄」)

(六) 深水家舊記「類集帳」・「制度考」

(七) 「世事見聞錄」四八・四九頁

(八) 「竹崎順子」四二頁。この逸話は六車茂一郎氏「津奈木

「郷土誌」其の他この地方の種々の郷土史に散見する。

(九ノ一) 「思想抱負識見高邁にして、實に肥後實學派の耆宿

と稱せられ、又肥後產業界の先覺者、文化生活の先驅者と稱せられたり」(肥後人名辭書)といはるゝ竹崎茶堂は、元來前述農家出身の儒者木下犀潭の弟で、出でゝ玉名郡坂下手永の惣庄屋兼代官などを勤めて居た竹崎家の跡を嗣ぎ彼自身も地士で御山見締を勤め後寸志によつて一領一疋に進んだ郷士であつたが、不遇時代の彼を認め阿蘇郡南郷布田手永に招いて塾を開かせたのは、布田の惣庄屋を勤めてゐた郷士矢野甚兵衛であつた。矢野甚兵衛はその他にも

大切畑用水溜池面積九町三畝歩を築造し、之によつて新に水田百餘町歩を得たといはれる。（「肥後人名辭書」「竹崎順子」七五—一〇三）

（九ノ二）儒醫の家に生まれ、横井小楠の門に學び、後年「肥後蠶絲業界の大先達」となつた桑陰長野濬平をして玉名郡南關手永に家塾を開かせたのは、その地の惣庄屋たる郷士木下初太郎國均であるが、彼自らも亦玉名郡中富手永・南關手永・坂下手永などの總庄屋として治績があがつたし、算數に詳しく和歌に長じ、後自ら郷黨の子弟を薰陶した。

（横井小楠遺稿篇二）一七頁。「肥後人名辭書」

（一〇）「世事見聞錄」一六五頁

兎もあれ軍事的なまた文治的な士的機能は、郷士の謂は、前面の機能であり、農工商的な庶民的機能は、その背面の機能であるとも言ひ得る。そしてこの兩面の機能を併せ營む郷士なるものは、封建的身分組織乃至職能組織の原則から見れば、明かに例外的變則的存在であつたが、かゝる變則的存在を制度としてさへ成立させ存続させた所以のものは、一體何であつたか。先づ考へられるものは、財政的な理由と治安的な理由とである。寸志による郷士の設立は、明かに藩帑の増收を狙つたものである。また小野博士のいはゆる特置郷士や救済郷士なるものも、「新地錢砲の者開き渡り地」や「御赦免開き」の田畑山林などが與へられたことによつてもわかるやうに、一面はそれによつて郷士の自活を圖つたのであるが、そのことは同時に藩としても一種の生産擴充に協力させること

（一一）「勸農策」田中惣五郎氏「綜合明治維新史」第一卷三二三頁所引

（一二）「横井小楠遺稿編」一九頁。これは町方寸志者に就ての言葉であるが、そのまゝ在方寸志者にも移すことが出来る。

（一三）「陣内志談」卷之一、三八—四〇丁

「制度考」

かどな、門名。家を稱するに姓を以てせず、その家業・本家分家別家等の關係・住所の地形位置等から派生した便宜上の稱呼を以てするもの。徳川時代以來特に農村に多い。

「日本經濟史辭典」

であると共に、また限りある藩帑からの知行や扶持米の直接支給を節することとなつたのである。救済郷士なる言葉は専ら郷士自身を經濟的に救済するといふ意味に用ゐられされてゐるが、實は郷士自身の生計と共に藩の財政をも救済するやうな働きを營んだのである。このことは所謂特置郷士に就ても言ひうるであらう。のみならず米穀増産・山林蕃茂・牧牛・畜馬・養蠶等勸農事務を取扱はしめるには、城下より出張する藩士達よりは、郷村に土着する彼等こそ一層適材たることが多かつたであらう。

更に治安維持的な理由といふのは、彼等をして直接に軍事的警察的機能に携はせただけを指すのではない。いはゆる舊族郷士の場合のやうに、前代からの大小の武人・豪族などを野に放置し若しくは冷遇して、藩の公的勢力から遊離させたり乖離させたりする代りに、郷士として相當の名譽と實利とを以て之を待つことは、やがてこの在野的勢力を懷柔し收攬して公的勢力に和せしめることとなり、そのこと自體が既に大きな治安的價值をもつ事態であつた。郷士制度は更に進んでこの可能的對立者たる在野的勢力をして、公的勢力の治安的機能に積極的に參加し協力せしめたのであるから、治安維持上一層效果的な役割りを完うしたのである。このことは若干の色彩を異にしつゝ、いはゆる登用郷士や寸志郷士に就ても言ひ得られるであらう。彼等は必ずしも前代からの在野的勢力ではなく、少からぬ場合に於て近代的な新興勢力である。然し封建制度下に於ける在野的勢力であることは否定されない。この新しい在野的勢力を懷柔し收攬して、封建的公權に對立せしめず、寧ろ協力せしめる一つの方策が、登用による郷士制度であつたと見られないか。それは財そのものの上での協力であると共に、

財政的能力、政治力、軍事力、文化力上の協力であつた。此處に於てもまた、可能的對立者を或る程度まで公的陣營に收め得たかの觀がある。この意味に於て、いはゆる登用郷士の制度も亦、一種の治安的效果を有つものであつたと言ひ得るであらう。のみならず、登用の理由となつたものの中には、たとひ數的には必ずしも多くなかつたとは言へ、武藝によるものもあつたのであるから、登用郷士を一概に「非戰鬥員たる郷士」と言ひ、おしなべて「文官的性質を帶ぶ」と稱するのは妥當ではない。

寸志的郷士に對して、銅臭芬々といふやうな言葉でかたづけけることは、舊藩時代にもあつたし、今日の學者の中にもあるし、且つそれは確かに寸志的郷士の性格の一面を表してゐるには違ひない。然しただこの一面をのみ見るのは、或ひは無反省な封建的イデオロギーの觀點に捉へられてゐるのではないか。それは硬化した封建的身分制度の下に、倦み易い庶民生活に對して一種の向上の刺戟を與へ、志を遂げさせる通路たり得たと共に、彼等の力をまた公的な運営に或る程度まで活用することも出來たのである。それは單に財政的治安的機能に限られるものではなかつた。

ただ舊族郷士のやうな謂はゞ前代からの郷士と、寸志などによる謂はゞ新生的な郷士とは、いづれも元來在野的勢力であることは共通であるが、差異もまた少くない。即ち前代からの郷士は、その前歴に於て、封建的公權の掌握者と大差あるものではない。いづれも武人的經歷をもち、ただ運命の禍福が一方を公的の地位に据ゑ、他方を野に下らせたに過ぎない。之に對して、新生郷士はその成立の根據を異にする。彼等とて遠い祖先に遡れば、

かつて下野を餘儀なくされた武人の子孫であることが少くない。然し一旦浪人となり百姓であつた彼等をして、新たに郷士として封建的特權層のたとひ末席にでも加はり得しめた所以は、藩士や舊族郷士の據つて立つ根據とは明かに異なるものであつた。

一〇

明治維新に際して郷士の身分は如何様になつたであらうか。

「明治二年十二月廿四日、本藩公辭の名稱を改め坐班式官俸等を規定し藩中に達す。」

「明治三年七月三日、我藩坐班式を改正す。」（『肥後國事史料』卷十）明治二年の坐班式に於ては、舊藩時代の家老以下苗字帶刀御免以上二百數十種にのほる役席が、官等九段階に整理された。その中で郷士の位置を探すには、下の方から見て來た方が早い。苗字帶刀以上地士までが九等官、一領一疋以上歩小姓までが八等官、獨禮以上目見醫師まで七等官、中小姓になつてやうやく六等官に連なる。この煩瑣な坐班式は翌年一層簡約されて、士族と卒族との二段階になつた。八等官以上即ち一領一疋以上が士族となり、それ以下が卒族となつた。（註）それは七月三日のこと、その後十日を経て七月十三日には部分的改正として卒族の内足輕以上の者が士族に加へられる旨布告された。越えて八月廿四日民政局より

一手永を郷と唱可申事

一 在家人を郷士と唱可申事

との達があり、同年十月更に坐班式が改められ、奏任官・判任官・等外官・士族・卒となり、醫師・入贅・郷士の名が士族の内譯として見えてゐる。明治五年二月十四日太政官布告「從來郷士と稱し由緒有之候者は士族入籍可被仰付候條、委細取調書を以て大藏省へ可伺出事。」郷士達は殆ど皆家系書を差し出した。多くは士族への入籍を熱望して。然し中には、士族・卒・平民などの區別は新政の趣旨に副はないものとして、士族に列することをいさぎよしとしないやうな者もあつた。それは當時差し出された家系書の中にも覗はれるが、歸農願・歸商願で一層明かに表明された。然しそれらの法制的形式的な身分の歸屬問題よりも、一層實質的な社會的文化的機能の領域に於ける彼等の位置の問題に移ることしよう。そこで郷士の二重的複合的性格は如何様に働いたであらうか。

明治維新によつて士族達は封建的特權を失くした。矢つぎ早に施行された祿制や兵制の改革は、誠に致命的な打撃であつた。少からぬ士族にとつては、新政府によつて約束された僅かな家祿だけでは、殆ど今日明日の生活をすら保障するに足りなかつた。かくて轉向による賤生の道が急がれた。然しその道の行くては、未知の霧に閉ざされてゐる。否、從來知ることをすらいさぎよしとしなかつた分野へ通じてゐる。祖先傳來賤しんで來た農工商の後塵を、今や自ら拜すべき時になつた。彼等の意識にとつて、それは明かに大きな顛落であつた。

明治二年の新しい祿制によつて家祿八石七斗五升といへば、封建時代に於ける元祿も四十石内外の小身である

が、(註二)「私儀笠細工等之祿ヲ以內職ニ仕、家計補來候得共、寸斗生活育途立兼候」(原文の儘)と生活難を訴へてゐる。次は新規家祿十石五斗即ち元祿約六十石であるが、「方今文明開化ノ御仁政民榮教育ノ折柄無能ノ身ニシテ三民ニ長立、剩へ袖手坐喰ニシテ未タ寸毛モ功ヲ不奉報朝恩、所謂天地ノ徒夫ト常ニ怖懼ノ仕合奉存候」と言ふ。士として農工商の上に位する自らを「無能ノ身ニシテ三民ニ長立」と反省し、家祿によつて衣食することを自ら「袖手坐喰」する「天地ノ徒夫」と卑下せずに居られないのである。いま一人は當時家祿二十八石五斗とあるから、元祿は二百石から三百石までの間にあつた人で、措辭も前者より整つてゐる。「私儀元來頑愚ニ而飽食暖衣逸居スルノ愧ヲ不願消光罷在候處、幸ニ萬般御維新ノ公化ニ浴シ、自悔悟奮發仕候而、家祿空然私有ノ責ヲ逃可申云々」然しこゝでも武士的生活に對する矜恃と自信とは明かに失はれてゐる。

かくてこれらの人々は、或ひは自活の途をたてるために、或ひは「袖手坐喰」「天地ノ徒夫」たることを懼れ、「飽食暖衣逸居スル」を愧ぢ「家祿空然私有ノ責ヲ逃」れ、ひいては「朝恩に報い奉る」ために、家祿による金利的生活の外に何等かの産業に「取着」かうとする。然し「營業ヲ設ント欲トモ素ヨリ經濟ニ疎ク且金力ニ乏シ」い。そこで「扶祿奉還奉願、資本金拜受シテ實業に身を委ねたい。ところが「只今家祿不殘奉還候テハ將來うまく行かない場合に「後來涸魚ノ類ト深愚願」される。ついでには「御仁恤ニ募リ兎角ノ嘆願奉恐懼候得共、前條目的御座候ニ付、何卒永世之内半高奉還御祿聞濟被仰付」度旨懇願してゐるやうな慎重な、或ひは不安と疑懼とに満たされた、足どりを示してゐる人々も居る。そして當座こそ「聞商」たるを免れないが「五六ヶ年内ニハ必熟商ニ至リ可申」と言

ふはかない期待の下に、「家祿十石五斗ノ内半高五石二斗五升ハ奉還奉願度分」、あとの半高「五石二斗五升ハ熱商マデ殘置度分」であると願ひ出る者もある。(註三)

然し現實は彼等の上に酷しかつた。明治八年三月内務卿は太政官へ左の如く具申してゐる。「是迄奉還致候者共多くは困窮に至候趣相聞候に付、今般各地方現場の模様及取調候處、別紙の通申出候中には、稍々恒産の端緒に就き候者も相見え候得共、目前の浮利に迷ひ一跌目的を失し忽ち窮乏に陥る者十の七八。」(註四)中には颯爽として政界、財界乃至思想界の表て通りを濶歩した人々も無いではない。然し純土族大多數の行路は、いばらに滿たされてゐた。

この間にあつて郷士の事情は多分に違つてゐた。彼等の大多數は從來とても封祿によつて家計を立ててゐたのではない。町方の寸志ものが富める商人であつたやうに、在中のそれは概ね地主であつたし、その他に若干は商工をも併せ營み、しかも自家の生計を維持する他に、しばしば多額の獻金獻穀をなしうる程に、彼等の收入には餘力があつた。農にせよ商にせよその道の熟練者、成功者が多かつた。のみならず維新以後法制の變革によつて家士は知行所を失つたに關らず、郷士は從來經營の土地に對する所有權を確認された。

文にせよ武にせよ城下第一流の人士以上にこそ出でなかつたとしても、相當の教養をも身につけた人々が郷士の中には少くなかつた。彼等は政治的にも經濟的にも文化的にも鄉村の指導者層に屬し、それにふさはしい見識と氣魄とをもつ者も稀れではなかつた。郷士のすべてがさやうであつたのでは固よりないが、かゝる人物が少く

なかつたことは否定されない。しかも彼等の地位が在中で如何ほど高かつたらうとも、城下では概ね輕輩であり輕輩以下の扱ひでさへあり、おしなべて在郷兵衛として蔑視されてゐた。彼等は自家の富力によつて封建的身分制度を利用し或る程度まで封建的身分を取得し、その限りに於て封建的特權をも享受し得たことは事實であるが家中の侍に比してその特權は微々たるものであつた。かくて全體として封建的身分制度に多大の好意を寄せ得なかつたし、少くとも家中の純士族ほどに之に對して執着を有たなかつたことは當然である。一步進めてかゝる封建的身分制度の打破に、更に廣く封建的なもの一般の打破に、熱心果敢な者がその中から現れたとしても、不思議ではない。かゝる者は、封建時代には封建的特權を僭取しその餘度にもあつかつて居たに關らず、今維新ともなれば封建的なものの破壊に狂奔するものとして、即ち一種の時流便乗者流として、硬化せる封建的觀念の支持者達からは、嫌忌されることが多かつた。それにも關らず、藩に於ても國に於ても、各種の領域に着々として新生面を開拓して行つた人々の中に、少からずこの圈内からの出身者を見出だす。元來彼等の生活した領域は單一でなかつた。視野も亦従つて比較的に廣かつた。生活上の弾力性と視野の廣濶とは、時代の大きな變轉に際してその歸趨をよく豫見せしめるに役立つたのである。

明治年間殊にその初期に於て我が國の政界・産業經濟界を指導したものが、主として士族出の人々、特に下級士族出の人々であつたことが、多くの人々によつて指摘されてゐる。そのことは正しい。然し所謂士族なるものを單に農工商にあらざる社會層とのみ考へるならば、不正確である。所謂士族なるものの中には、右に述べた郷

士のやうに、農工商的要素を多分に併せもつた人々が含まれてゐたのである。そしてこの人々が士族としては下級に屬するものであることは事實である。然し彼等は純粹な士族中の下級者とは明かに異なる性格を有つてゐた。彼等が新しい時代の新しい活動領域、特に新しい産業の領域に進出し得た所以は、單に士族の下級であつたといふことだけでは、十分の説明がつかかねるのではない。寧ろ一面に於て士族的社會層乃至社會圈に屬し、同時に農工商的社會層乃至社會圈にも屬した郷士の複合的性格、或ひは郷士そのものでないまでも、何等かの因縁によつて郷士に類するかゝる複合的性格の所有者で彼等があつたことに、少からぬ意味があつたのではない。この意味に於て、左の解決は傾聴に値する。「明治年間殊に其の初年に於て我國の經濟界を指導したるものは主として士族出の實業家であつたが、併し其等實業家の前身を見るに、其の祖先が商人であり、或は若年の頃商業に従事したる經驗を有し、或は又武士の身の上であり乍ら、商業に關係を有する地位にありし者である。」「さればこそ多くの士族が無經驗のため『士族の商法』として失敗したるにも拘らず、前に掲げたるが如き人々は新進實業家として其の名を揚ぐるに至つたのである。」^註即ち維新後經濟界を新しき方向に開拓し指導した人々は、士人にして商人であり、或ひは商人にして士人である如き人々であつた。それは士と商との複合的・二重的・兩端的存在として、本稿の寸志もの、入贅士族、郷士そのものであるか、さうでないまでも多分に之に類する性格を有つものであつた。彼等がかつての複合的・二重的・兩端的性格の故に、今や新しき時運の水先案内的役割りを完了した。この關係は單に產業界に限らない。政界にも思想界にも見出される。かゝる事例として、今はただ「實

學」の旗幟の下に高邁の識見一世に鳴り、肥後のみならず中央にまで革新の氣運を捲き起した横井小楠の門下に參じた人々を指示するに止める。(註六)

註(一)「明治三年七月三日我藩中より徵集せる兵員を解放し舊一門家老以下諸家家來を本藩士族卒族に採用す」(肥後國史料「卷十、五五四、五頁」右に關する藩廳よりの達によれば、等しく中小姓と言つても、藩公直參や舊一族家老の家來であつたそれは藩の士族に、その他の三千石以上の知行取に仕へてゐたそれは藩の卒族にといふ様に、待遇上差別されてゐる。それらの詳細は此處には省略する。

(二) 明治二年十二月熊本藩達によつて大夫・士及びそれ以下の面々の家祿が定められた。之によれば祿制二十一等に分れ士族に止まる。規則に示された最高は、元祿萬石未滿九千石迄が現米二百五十石で、最下は元祿四十石未滿三十石迄が八石、元祿三十石以下は是迄之通となつてゐる。

(制度考「四三、四四頁」)

(三) 熊本縣藏「明治七年家祿奉還願」關係記錄

(四) 「明治財政史」第八卷九頁所引

(五) 菅野和太郎氏「日本に於ける會社企業發生史の研究」(特に「士族と會社企業」)

(六) 山崎正董博士「横井小楠」上下。この點に關する詳細の實證は改めて之を取上げる。

(後記) 先づその正體を見届け、それに焦點を合せて問題や考へようとした。ところで郷士制度の構造と機能とは、多くの人々の研究によつて多分に明かにはされて來たものの、なほ全貌が示されてゐるとは云へない。社會範圍錯綜の問題と直接關係の乏しい點にまで記述が及んだ所以である。なほ諸地方の郷士には共通性と共に地方的特性が少くない。これらの地方に於ける具體性を明かにすることは、共通性を知る上にも必要である。此處では特に肥後藩のそれを取り扱つた。

特に大竹貫一氏「舊肥後藩に於ける郷士制度」にも指摘されてゐるやうに、從來公にされた資料も研究も甚だ乏しかつた葦北郡方面の郷士に就ては、此處に幾らかその缺を補ひ得たと思ふ。然し特に末期的郷士として重要な町方寸志者や、明治維新前後に於ける郷士の獨自なる文化史的役割や、階級周流の典型的存在としての郷士などの諸問題は、一瞥を與へることすら出来なかつた。當面の問題とした社會範圍錯綜のそれさへ、説いて未だ詳かならざる怨みを免れない。それらは凡べて改めて之を取上げることとする。尙本稿の初めに掲げた資料以外、熊本縣廳及び熊本縣圖書館所藏の舊記類を閱覽する機會が與へられた。關係者各位の好意に對し深く謝意を表する。

頁 行 正

誤

一四五ノ終

「保田窪の殿」

「保田窪どん」

一四六ノ三

「保田窪の殿」といふ
抑揄的な呼び方もそ
れらのことから起つ
たのであらう。

保田窪といふ地名が
寧ろ一種の賤稱
に近いものになつた
らしい。

一六四ノ七・八

水俣會所見締、井樋
見締、櫓楮見締、楮
見締、御制度見締、
薪見締

水俣會所見歩、井樋
見歩、櫓楮見歩、楮
見歩、御制度見歩、
薪見歩

一六六ノ左三

「保田窪の殿」

「保田窪どん」

一七四ノ一

親船持

大船持